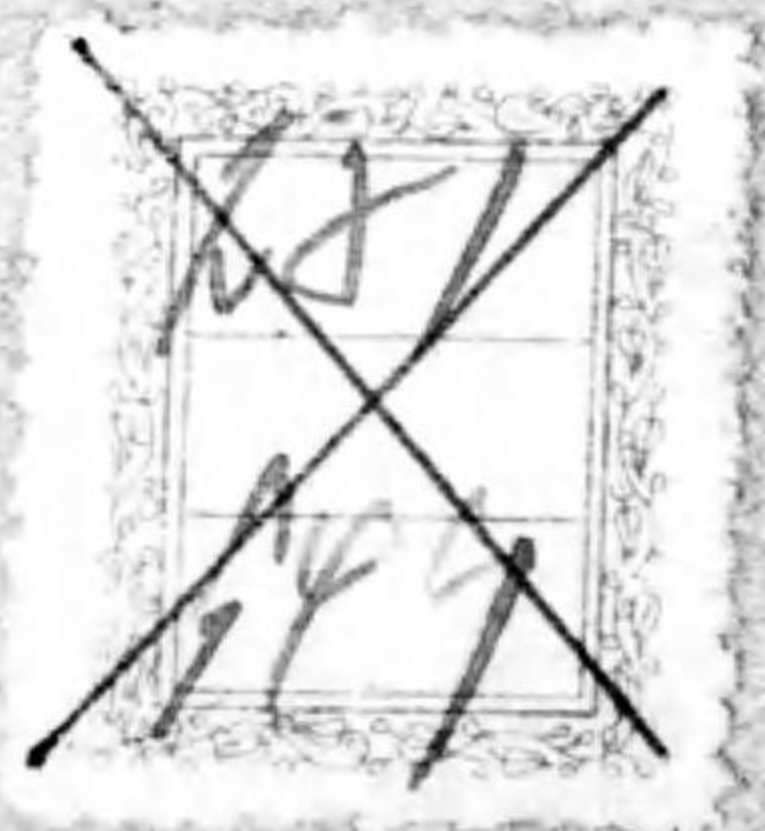


特100

507

新編
本草綱目
卷之五



始



特100
507



支•滿•鮮

實

業

見

物

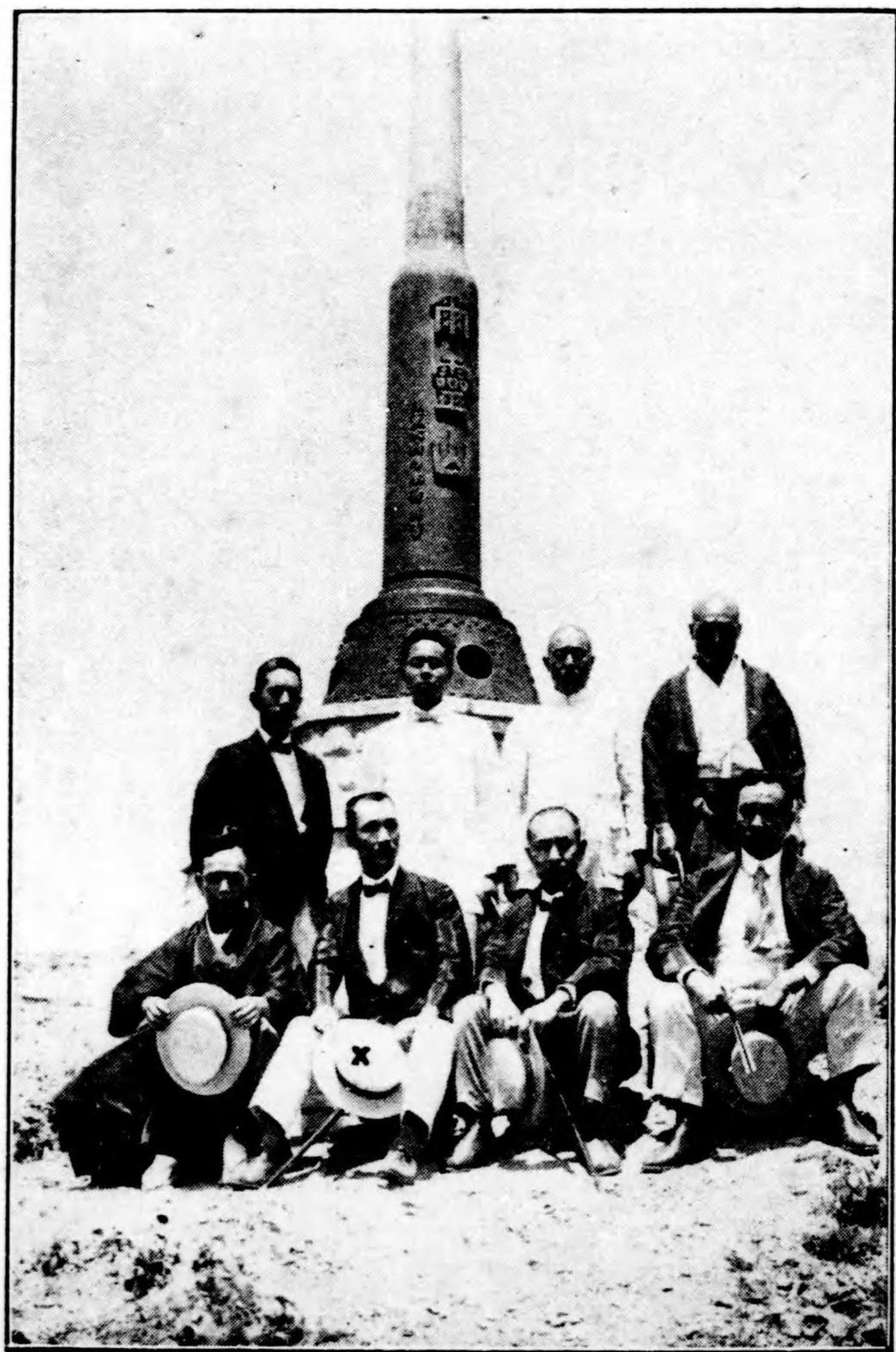
木

津

金

平





(印×) 者著の上山靈爾



序言

序言

本書は大正九年七月縣命に依り海外實業視察員として、朝鮮
滿洲及南支那を縦斷し、其見聞せる處を手記せるに過ぎざる
もの、然も一介無名の商賈が三旬の日子を以つて、大陸多方面
の視察と稱するも徒らに皮相の見のみ、加之行文難晦、記して
意を盡さずと雖も、見解は人によりて各々之を異にす、乃ち非
才自ら揣らす、乏しきの筆端に因つて率直に録舒し、以て記念
とす、幸ひに閲讀を得ば、著者望外の光榮なり。

大正九年八月秋立つ日

金平しるす

鮮滿支實業見物目次

一、出 發……………一

三重縣實業視察團——大阪の煙突——博愛丸のコレラ檢疫

二、釜 山……………三

濃霧の釜山港——商業會議所——素張りしき膨脹——日本茶——七面鳥と鯖の罐詰

——再製鹽——水産の釜山——縣人の漁場——朝鮮の大支關——海陸の連絡——縣

人會と東萊溫泉

三、京 城……………一〇

丸裸の山——朝鮮の田植——水原勸業模範場——朝鮮總督府——肥料干鰯の砂——

農業本位の朝鮮——米の喰延し——自足的經濟——供給餘力の促進——新設會社の

次目

濠興——妓生と朝鮮料理——鮮人市場——商品陳列館——昌徳宮と秘園——中央試験場——加藤清正とパゴダ公園——商業會議所——鮮人の投機思想——景福宮——博物館と總督府の新築工事

四、安東縣

朝鮮人の怠惰——商業會議所の統計——鴨綠江製材無有限公司——鋸屑の燃料——取引先日陞公司——油房——世界的柞蠶糸——鴨綠江節——大豆と貨幣の取引——商品で儲けて金で損——大豆粕と製造法——大豆の貯藏法——鎮江山公園——安東縣の將來——國境關稅の恩点——よく働く支那苦力——本溪湖煤鐵公司——赤い夕日の古戰場

五、大連

遼東半島——商業會議所——目覺しき發展——日本は大連、支那はハルビン——滿

次目

洲は大豆の國——丸裸の苦力と小寺油房——大連取引所と信託會社——大連埠頭の偉觀——一棟五千四百坪の倉庫——豆粕と大豆の検査法——混合保管——星ヶ浦遊園地——偉大なる哉滿鐵王國——中央試驗所——暑い沙河口工場——支那風呂——大和ホテルの屋上庭園と縣人會——住宅難の大連

六、旅順

戰蹟見物——博物館と鐵城翁の朝鮮甲冑——木乃伊——二〇三高地の彈片——萬人齋仰爾靈山——老鐵山發掘の石斧——白玉山——二萬の英靈——紀念陳列館と當時の彈痕——兵器の血痕

七、撫順

滿鐵撫順炭鑛——地下千二百尺——薄暗い安全燈——瀧砂充填法——炭鑛工業課——モンド瓦斯——硫酸アンモニアの製造——露天堀の壯觀——出炭年額三百二十萬

次目

噸——千人の藝者

八、奉天……………五〇

四通八達の奉天——張作霖の本據——新市街の偉觀——奉天商業會議所——滿蒙經濟の中心地——蓄産業——領事と北京行の危険——戒嚴令と物々しき警戒——宮殿——北陵——奉天軍の出兵——北京行中止——茶の需給關係

九、開原……………五六

一躍滿洲大豆取引の中心地——三井物産出張所——優良な豆粕——糧棧の囤積——對人信用の確實なる支那商人——開原取引所——倉庫と野積——大豆の産額——武装した支那兵

一〇、上海まで……………六〇

早魃と喜雨——雨天は安息日——滿洲の十日觀——投機的な人間は駄目——上海航

路神丸

一一、上海(其一)……………六二

揚子江——仁丹の廣告——上海は西洋の町——東亞同文書院——支那革命の砲火——千二百の卒業生——市街と公園——印度巡查の交通整理——天蟾舞臺の支那劇

一二、蘇州より南京……………六五

通譯俞耀生——支那國有鐵路——兵士に尋問——驢馬の頭に鈴——水の都蘇州——虎丘山——留園と盛宣懷——姑蘇城外寒山寺——千里の耕野——南船北馬——南京城壁の稻光——排日の餘勢と南京見物——明の故宮——野花吹く明の孝陵——秦淮河の畫舫——孔子廟——茶店新貴芳閣——朝天宮——莫愁湖——清涼寺——六朝の遺址古鷄鳴寺——北極閣——南京は學府

一三、抗州……………七〇

西湖見物——浙江の大沃野——蠶繭の本場——西湖の舟游——支那の「瑞西」——
幅の南畫——三潭印月——日本領事館——此處は仙人生活だ——杭州商業は上海の
勢力範圍——日貨排斥

一四、上 海 (其二) 七三

三井物産支店——大豆粕と上海特産肥料——上海取引所——大日本商業會議所——
十億の貿易——日本貿易の位置——出入船舶千八百五十萬噸——牢固たる英國の勢
力——長江貿易——日本産業上の恐るべき大問題——肩身の狭い日本人——物騒な
城内の見物——大陸と袂別——筑後丸乗船

一五、歸 着 七八

單調な航海——日本的氣分——下關上陸——旅行は實社會の學校——海陸四千四百
五十哩——厚遇を蒙りし各位の芳名と感謝

(丁)

鮮滿支實業見物

三重縣海外實業視察員

木津 金平 著

一、出 發 (七月二日——七月三日)

今度の旅行は全く未見の地にして且數年來是非一度跋涉して見たいと思つて居つた地
方だけに、定めし得る所も尠くならうと、出發前既に心中大なる希望に満ちて居つた。
出發と定められた、七月二日午後二時照りつける上野町驛を多數の先輩知己に見送ら
れつ、伊賀上野驛にて伊勢より來たれる團員一行三名と合し、二時四十五分、田中上野
商工會長發聲の三重縣實業視察團員萬歳の歡聲裡に送られて長途の旅に上つた。恰も京
都に行かるる山脇知事と同車し、長旅の注意と前途の祝福を受け木津驛にて別れた。
汽車は大阪に近く、車窓より眺むるに林立せる煙突の三分の二は煙なく財界不況の反

影を物語つて居るやふだ。車中九十二度の暑さを漸く五時三十分大阪驛に着いた。

午後八時三十二分大阪驛發特急列車は分秒の遅速もなく翌三日午前九時三十八分下關驛に着いた。速絡船の出帆までには約一時間の餘裕があるから、案内記で見て置いた、歸路上海乗船の船室豫約をせんものと、郵船會社門司支店へ電話を架ける、甚だ要領を得ない、漸く豫約は出發港よりするの外なき事が判つて、直ぐ棧橋へ出る。船は博愛丸といふ二千六百三十噸の格好の良い船である。船室へ這入り、浴衣に着更へて居る處へ税關吏が来て、極めて簡単に所持品の検査が済む。

十時三十分船は纜を解いた、油を流したやふな關門海峡を、濃き薄き遠近の島々に送られて、涼風に滿つる甲板が一こしきり賑ふ。對馬を左舷に見て、朝鮮海峡に入るに及び、漸く動搖甚だしく、夕食の卓上半ば空席にて拙者もまた食事をそ〜くに寢台に親しむといふ不甲斐なさ。

船は濃霧の爲め豫定より一時間程後れて、十時三十分頃釜山港沖合に投錨した、此れで漸く一安心。船暈の憂き目を免れて甲板へ出る。瓦斯に包まれた釜山港の電燈は朦朧と

して、天色また暗憺たりだ。然も内地虎疫猖獗の爲め、檢疫檢便の済むまで約十二時間空しく停船せなければならぬといふのだから溜らない。文明を誇る内地よりの乗客が、新附殖民地に入るに檢便を受ければならぬといふ、矛盾を目の前に見せ附けられて概嘆しつゝ、ベットに入る。

二、釜山 (七月四日)

午前十時迄は上陸が出来ない、觀念して居ながらも、六時頃から甲板へ飛び出す、もう元氣は舊に倍して居る。細雨霽々として濃霧に包まれた釜山港の連山島嶼も指呼の間にあるながら眺望明かならず。漸く霧晴れて、雄大な港内は展開された。西北一帯は山を以つて圍み東南は海に面して絶影島及赤崎半島と對し、灣内海水深く、實に天然の良港である。海上から眺めた釜山は立派な港町で、其の山を負ひ海を控へて、松翠蒼々たる龍頭山は近く海岸に迫り、其を廻つて三面に市街が並び建てられてゐる。

九時船は進航を初めて棧橋へピタリと横付になる。友人成田直郎君の顔が見える次い

で吉川忠太郎君、伊藤庄之助君が來り迎へられた、船と陸とが久潤を舒し交話するうち
 檢便も滞りなく濟みて十時上陸する。まづ白衣の鮮人が優美な衣冠を着け、大きい雁首
 の羅字の長い煙管を銜へ、後手を組んで悠々々徘徊して居るのが目に付く、畫にしたい
 やうで物悲しい感じがする。

縣人數氏來り加はつて一行を出迎へられ、諸氏が心盡しの自動車に搭乗して伊藤氏の
 邸宅に入り午餐の饗應を受けつゝ、縣人諸氏が各方面に活動せる状況を聞き、視察上の
 巡路等を打合せ、午後二時より自動車に投じて市中各所を視る。日本との交渉の歴史が
 最も古い町だけに朝鮮と謂ふやうな気分はしない。純然たる日本の町で、内地に居るこ同
 様、賑やかではあるが趣味さいふものはない。

まづ商業會議所に入る、豫め伊藤氏によつて紹介せられてあつたものだから、日曜日
 に拘らず、書記高木隣道氏出勤せられ、一行を迎へて階上の商品陳列所に導かれた。陳
 列品は主として、我移出品中鮮人に需用せせらるゝ綿糸、綿麻布、熨斗、硝子器等及朝
 鮮産出の器具、織物、水産物、米、大豆等の農産物である。三階の一室に絶影島を眺め

つゝ貿易の現況を質れた。

釜山港近來の發展は實に素晴らしいものである。大正六年の輸移出入總額五千七百七
 十七萬餘圓であつたのが、七年には一億百二萬餘圓となり、更に八年度は一億五千四百
 八十三萬餘圓となつた、尤も斯かる異常の發展は決して自然的膨脹ではなく。物價騰貴
 に伴ふ金額の自然増加に起因する事は、數量と對照すれば自ら分ることであるが、何れ
 にしても戦前即ち大正三年度に於ける朝鮮貿易總額九千七百六十二萬圓に對し、釜山港
 は二千八百七十萬圓(二割九分三厘)であつたものが、戦後即ち大正八年度に於て、朝鮮
 貿易總額五億千四百萬圓に對し前記の如く一億五千四百八十餘萬圓(三割五厘)を占めつ
 ゝあるが如き、其の目覺ましき發展を認めざるを得ない。更に其内容に就て觀るに、輸
 移出に於ては米、大豆を筆頭に魚類、繭、棉花等を主とし、輸移入に於ては金巾、綿糸
 布を最とし、此に亞ぐに砂糖、石炭、木材等が主なるものである。貿易關係は内地が其
 の大部分なるは勿論であるが、其の他は對支貿易である。

今輸移入品中三重縣重要物産の一つである。製茶の輸移入年額を觀察するに、年々漸次

増加の傾向にあるも、單に在留内地人の需要に限られ、實に僅々たるものであつて、大正七年度に於て十一萬六千八百餘斤、金額五萬五千三百餘圓である。品種は煎茶と川柳類は數量に於て相伯仲し、主として、坂神、山城地方の商人に因つて移入されて居る。

會議所を辭去し、釜山の對岸にて工場地である絶影島に渡り、鮮人部落に入つて其の生活の一斑を覗ひ、輸出食品株式會社釜山出張所に主任岩中半六氏を訪ひ、同氏の案内によつて完備せる工場(目下作業休止中)を一巡して説明を聞くに、當工場は大正六年春の開設であつて、主として米國行鯖魚の罐詰事業に従事して居る。鯖の最盛漁期は九月頃より翌年の三四月頃までであつて、大正八年度の製品輸出高は實に七十萬圓、而も年々益需要の増加を見る傾向にあると、其の理由とする談話によれば、元來米國人は七面鳥を尤も珍重嗜好するけれども、價格高價なるにより一般の食膳に上す事容易ならざるを同社にて熟知し、技師を彼の地に派して研究の結果、鯖の纖維及味等七面鳥に酷似せるを發見し、種々製法に苦心の結果、輸出を試みたるに價格の安價なると相俟つて非常

に米人の嗜好に適し好評噴々として實行良好。同社の如き益事業の擴張を策つて居るに見ても其の事業の有望なるは窺ひ知られる。

轉じて林業漁業部再製鹽工場を見る、製法は至極簡單である、只海水と原鹽を煮沸結晶せしむるのみであつて、一釜にて晝夜二回を製出し、黒色を帯べる原鹽は純白に再製されて内地鹽と些の相違もない。此種の事業は當地に十二ヶ所あつて、原鹽を青島及關東州より輸入して居る。此又當地に於ては有望なる事業として囑目されて居る。

絶影島を去つて歸途釜山水産株式會社の製氷工場及魚市場を見る。同社は釜山水産界の權威であつて、斯界の先覺者として古き歴史を有し、漁場の探検、漁期の試験、漁具の使用、餌料の採取等、沿岸漁業に關する諸般の調査研究をなし、只管漁業者の指導獎勵に努め傍ら魚市場を設けて漁獲物を競賣し販路の便に供し、或は羅老島に於て模範的漁村の經營をなすなど、釜山港水産事業に對し貢獻する處枚擧に遑あらず、實に水産界に於ける恩人である、従つて同社の事業も著しく好果を收め現在資本金七十萬圓にして魚市場の水揚高の如き大正七年度に於て百五十萬圓を算して居る。

縣人守谷商店伊藤庄之助氏の經營する蔚山漁場の視察を同氏より勧められたが、豫定時間の都合にて見る事の出来なかつたのは縣人の事業といふだけ、それだけ遺憾であつた。伊藤氏の談によると、同漁場は現在使用鮮人五百餘名（現今一人給料食料付月二十圓位）にて最近年額二十五萬圓を輸移出して居る。漁網は地曳、九疊、シバリ、巾着等の各種であつて、鮮魚として鱒、鱈、太刀魚、石首魚等、乾魚としては煮子イリコ稱する雜魚類である。仕向地は各方面に渉つて居るが、乾魚は内地、鮮魚は朝鮮奥地及南滿地方へ主として輸移出し、鮮魚中石首魚は全然朝鮮人の食用である。

如斯釜山は朝鮮沿海中最も漁業の發達せる南鮮漁業地の中心に位置し、殊に潮流の關係によつて魚族の豊富なる事全道に冠絶し、交通運輸の至便と、各種直接の機關も亦整備せるを以て、現今朝鮮沿海に活動する内地出漁者の大半は釜山を中心として居住する者其の數々千名に及び、年々朝鮮、滿洲及び内地に於ける各需要地に供給せらるゝ、巨額の魚類、海藻、魚肥料等、其價格一ヶ年最近一千萬圓以上に達し、各種貿易品の朝鮮各港中首位にあると共に此又各開港場に冠絶して居るのである。

實に此處は朝鮮の大玄関、大陸の門戸として日本との連絡の關門であつて、今や人口六萬五千餘、内地人三萬餘に達し、尙益増加の傾向がある。港の整備せること朝鮮第一にて、第一棧橋は三千噸級の連絡船が二隻横付になる仕組で、第二棧橋は大正六年度完成を告げ、棧橋の兩側には二萬噸級の汽船二隻及七千噸級の汽船二隻計四隻を同時に繋留する設備になつて居る、又一方鐵道の引込線が來て居つて、船車の連絡は他に比を見ることの出来ない完備したものである。

陸上の倉庫設備も、税關保税倉庫を始め四倉庫會社があつて、棟數三十八、七千餘坪を有するも、年を遂ひ倍々保管貨物の數量増加して、絶へず倉庫の不足を告げつゝあるの盛況である。而して出入貨物の多くは前記輸移出の重要品たる、米、豆其他の穀物を主とし、綿糸布、金物類、繩ひ等の輸移入品之に亞ぐの現狀である。

縣人諸氏の好過辭み難くて、六時三十分、伊藤、吉川兩氏の案内にて、自動車釜山の北方三里餘の仙境東萊温泉に驅つた、温泉場は金井山の麓に在つて、東方連嶺と相對し、梵魚寺川は村の西端を流れてゐる。蓬萊館といふに入り、内湯に浴して三日以來の

疲勞さ俗腸を洗ふ。浴場の設備、客室其の他の結構完全して、泉質は清澄なる鹽類泉である。折柄雨來つて、涼味更に加はり、四圍の青山模糊として暮れて行く。夕食の饗應に感謝し、九時三十分自動車に揺られて釜山驛に歸着した。釜山驛の雄大なると廣軌列車の宏壯なるに驚いて居るさ、歐亞大陸の玄關は「ごうた」と成田君は拙者の肩を衝く。午後十一時發車の振鈴に多數見送られし、縣人會の諸氏と別れて汽車は雨の暗夜を北へ北へさ。疲れた身は夢路を辿る。

三、京 城

(七月五日——七月六日)

五日午前五時、汽車は太田驛に着く頃目覺む、沿道の風物すべてが異國に來たといふ感じを興へる、木無き丸裸の山は、鮮人の貧弱な生沼状態と調和して、物の哀れを覺える、總督府の施設にや所々に植林と、不完全な砂防工事の施されつゝ、あるを見て、幾分の心強さが増して來る、何れにしても此種事業の急施と普及は朝鮮開發の大眼目である

事を思はしめる。今田植の終末期とて、青田は内地と異ならざるも其の植付の亂雜に密集して居る有様は、稻の發育と收穫の點から見て、寒心に堪えぬ、正條植普及の急務である事が又込み上げて來る、然も灌漑の便なき朝鮮の田は今や旱魃に苦しみて全道植付を完了する事が出来ないとの事である、聞けば鮮地にては水ありて植付を完了するを得れば、大抵平年作の七分は收穫したものと見て好いとの事。實にこゝらが天與さでもないものであらふ。兎に角農業に於ても亦幾多改良施設の前途堅切なるを首肯せられる。汽車の水原地方に進むに従ひ、耕作物の稍整頓して面目一新の觀がある。流石に覺業模範場のあるありて、農事の發達に資する所尠からざるを思はしめる。龍山驛に着すれば、上京不在中である友人菊山嘉男君の代理なりとて縣人山田眞一君の出迎を受け、九時三十分南大門驛(京城)に着此處にて縣人小林源六君の出迎あり、山田氏の幹旋にて本町二丁目山本旅館に旅裝を解いた。少憩中小林源六氏來訪今夜縣人會の歡迎會に招待を受ける、固辭したが聞かれず、朝鮮料理の試食會と思ひ來れさのことに、午後七時を約して快諾した。

午餐の後、山田氏の東道にて、折柄の雨を冒し總督府に縣出身の郡茂徳氏（營繕課長）を訪れ、同氏の紹介にて殖産局水産課に行き課長及技師に面會し魚肥料の事につき買れた。漁業の發展に伴ふて年々亦魚肥料の製出も増加の傾向にある。大正七年度に於ては、數量四十一萬千五百貫、價格百十萬八千餘圓なりしもの、大正八年度輸移出検査總額實に百三十餘萬貫の巨額に達し、其種類を大別すれば、鯨搾粕七千四俵、鰯搾粕一萬六千四百四十四俵、干鰯一萬五百十六俵、干鯨一萬六千四百廿五俵、其他雜粕三萬九千四百十四俵となつて居る、此内鯨の如き食用に供せらるゝものもあるも、肥料としての供給力また侮るべからざる趨勢にあつて、慶尙南北道及咸鏡南北道は主たる産地である。從來朝鮮産干鰯等に砂の混入甚だしきは、其の漁期夏季であるが爲め、天日乾燥の際下層部に於ける腐敗を防ぐ必要上、日光に焼けたる海濱の砂を覆ひ乾燥の完全と迅速を策るに因つて生ずるのであつて、決して鮮人の商道上の悪意でない事が闡明された。水産課に於ても此の弊を矯正せんとして、三ヶ年以前より一層検査を嚴重にして、砂の混入を百分の五以内限定し、漸次優良品の輸移出に努めて居るそふである。

辭して農務課に篠原課長を訪ひ、三井技師を煩はして二時間程お邪魔した。朝鮮の殖産工業なるものは由來農業の外云ふに足るものがなかつた。従つて凡ての經濟關係は農業によつて保たれ、純然たる農業本位の國である。即ち全土の戸口三百二十三萬戸、一千七百六萬人中、農業者は二百六十五萬戸、一千三百九十四萬人（大正七年末調）にして、實に全人口の八割二分弱を占むるに徴し其の如何を卜すべきである。耕地面積の如き逐年未墾地の開墾を見るに至り大正四年度田畑三百七十七萬町歩なりしもの、大正七年度には四百三十四萬餘町歩となつて居、實に其の異常なる開發に驚かれるのである。現在水田百五十五萬町歩、玄米千五百萬石であつて、僅々一反歩一石平均の收穫に過ぎない。現今總督府が奨勵しつゝある米種の統一を普及し、集約的農業と灌漑水利の改善と相俟つて、優に三千萬石の收穫を得らるゝことは易々たるものであると思ふ。殊に鮮人の生活状態は、實に融通的であつて、凶作の年とか或は米價昂騰の場合には米食を廢し、他の食糧によつて堪え得らるゝ特有性にあるが爲め、喰延しは事實に於て行はれ得るは多年の衰頹を招來せる原因結果であつて、鮮人の産業に對する、恰も大家の潰倒と同様

即ち賣喰主義であるとも云ひ得られる、随つて肥料等の觀念は全然なく、近時漸く總督府の奨励によつて、大豆粕の施用を見るに至れるも、全道を通じて肥料使用高僅々四百萬圓に満たざる状況にある。

殊に多年壓迫政治の下に家富むれば禍の基と思慮せる鮮人は、其の農業の如きも、單に國內の需要を満たすに止まる、所謂自足經濟に甘んじ、其の耕作法は何れも極めて舊式であつた。従つて之が改良發達は今後前途遼遠の問題であつて、大に研究を要すべきものがある。特用作物として大豆の如きも三百萬石を産し、其他棉花、甜菜、煙草、人蔘、麻、麥等の改良研究を奨励し、副業として養蠶、牧畜等を盛んに奨励せば天興の富源は開發され、鮮人の啓發と相俟つて總督政治の統治上完きを期する近きにありし思惟するのである。

農務課を出で、財務局關稅課を訪ひ技師稅田谷五郎氏より貿易の概況を承はる、朝鮮貿易は經濟の發達に伴ひ、政府の産業上に於ける諸般の施設と民間企業の興隆とに因り逐年著しき發展を告げ、貿易總額の如き大正七年度三億二千二百七十萬圓なりしもの、大

正八年度に於ては五億千百萬圓となり、更に大正九年度五月中迄二億二千八百八十萬圓を計上して居る、従つて今後の七ヶ月下半期に於ては、財界の不況を見越すとも、朝鮮輸移出品の大宗たる米、大豆の收穫出盛期なるが故に、大正八年度を突破する事は明瞭な事實として豫期することが出来るのである。此の如き激増は近時價格の昂騰に因る事勿論なるも、朝鮮産業の發展は物資の供給餘力を促進したるに起因するのである。今輸移出品中大宗と稱する、米、大豆に付て見るに大正八年度にては、米二百九十萬石、一億一千三萬圓。大豆百二十二萬石、二千七十二萬圓といふ數字を示して居るのである。

一般商業も漸次隆昌に響ひ會社の如き大正七年の調査に依れば其の數三百廿三、資本金四億三千八百五十五萬圓であつて、這次財界の大動搖に際しても、營利會社の認可權は總督府の占有なるが爲め、新設會社の濫興なかりしにより、事業中止の會社尠なく、將來も益健實なる發展を見るであらふ。

總督府よりの歸路菊山嘉男君留守宅を訪れ令閨に面會し久瀾を述べ今回の厚意を謝して宿に歸つた。

午後七時、又山田氏を案内に煩はして水標橋觀水洞の金剛園といふ純朝鮮料亭に於ける縣人會の歡迎會に罷出る。在京縣人の有力者官民十五名の諸氏と朝鮮料理の卓を圍んで、和氣堂に滿ち、特に選ばれし日本語を話す妓生數名、清楚の風姿を醸へして酒間を幹旋する。郡氏の歡迎辭に拙者一行を代表して謝辭を述べ、妓生が數番の舞踊に朝鮮情調を味ひ興の盡くるを知らず、主客陶然として辭去せんとする時、縣人會の萬歳を唱和せられんことを提議したが、朝鮮内にては鮮人に對する統治上「萬歳」を禁じあるこの注意により、總督政治の細心なる用意を偲びつゝ、乾盃して主客の平安を祈り宿に歸る。

六日朝食前の時間を利用して、南大門側の鮮人市場を見物した、實に肩摩殷賑を極めて居る。鮮人取引の大部分は市場に於て行はれるを各地一般の慣例として居る、南大門側の市場の如きは毎朝開市して居るが、地方一般にては毎月五回又は六回定期に開市して附近の住民は勿論遠く八九里の地より出市し實に旺盛を極めて居るのである。朝鮮に於ける市場の數も大正七年末の調査によると千二百二十六箇所、一年の賣買高一億八千萬圓以上を算し、朝鮮に於ける重要な商業機關であつて、其の設置變更は地方經濟に

影響する所尠少なからざるものがある。近來鮮人も常設店舗を設けて商業に従事する者が漸次増加しつゝ、あるの傾向となつて居るが、多年の慣習は、市場を尤も便利として居るやふである。

朝食後山田氏今日の東道にきて來訪せられ、郡氏の厚意によつて總督府の自動車を拜借し終日見物することとした。

まづ商品陳列館に行く。所長奥田氏案内説明の勞を取られる。此處には朝鮮の産物が悉く網羅せられて居る、從つて手取り早く朝鮮の産業状態を知るに都合が好い、そして産業上のすべてが實物の比較に因つて幼稚なる鮮人に示しつゝある、周到な用意が窺はれて敬服の外はない。参考品として内外の商品も陳列されてある。樓上に人蔘湯の饗應を受けて、此處を出で、昌德宮に行き特に案内されてまづ秘園と稱する、御苑を拜觀す。見渡す限り一面緑の園にして、禿山ばかりの朝鮮にもこんな處があるのかと怪まるゝ位である、而も山水自然の地勢を應用し、松林あり池亭あり。綠林中に隱見する宙合樓は三百二十年前の建築であつて、結構風雅巧緻を極め能く四圍の風景と調和し、如何

にも元韓王が詩宴の樓と首肯れる、丘を上り或は下り古雅掬すべき小亭、或は御親蠶室等を見て、遂に最も奥深き玉流溪に到り、ラジューム水に渴を醫した、案内人の話による此の水を飲めば長命すると言ひ傳へられて居るさか。溪流淙々として涼味津々閑雅幽寂の境地である、溪中の石に刻して「飛流三百尺、遙自九天來、知是白虹起、醜成萬岳雷」と題詠誇大なれども亦其の景趣を窺ふに足らんか。更に轉じて目下御建築にある李王殿下の宮居及數多の結構莊麗なる殿樓を拜し、御苑内にある李王家所有の博物館を見て、元來し道に出で自動車を馳せて朝鮮總督府中央試験場及工業傳習場を訪ひ所長三山氏に面會し、概況を聞き、同場に職員たる縣人橋本氏の案内にて製品陳列場より、金工、木工、窯業、製紙、石鹼、油脂等の實習室を見、窯業試験場、分柝室、電気室等を巡覽した。工業傳習場は目下生徒二百名(三年卒業)にして内地の専門學校の程度である。可成朝鮮人の就學を奨励しつゝ、あるも、昨年度の事變にて鮮人の入學志願者減少を見、現在全生徒中の三分の二に満たざる状態なるも、漸次入學志願者多きを加ふる傾向にありさか。

京城一の殷賑地なる鐘路を通り、パゴダ公園に入りて、文縁の役加藤清正の日本に持歸らんとして、果すを得ざりし有名なる、高さ四丈、十三層の大理石塔を見る。山田氏の厚意によつて總督府の京城俱樂部に午餐の饗應を受け少時疲勞を慰めた。午後二時京城商業會議所に大村書記長を訪れ、京城經濟界の現状を聞く。京城は人口二十五萬餘、内、内地人六萬七千人、貿易としては需要地なるが故に、輸移出には見るべきものなく貿易總額三千三百六十五萬圓(大正七年末調)中僅かに一割三分に過ぎず、即ち絶對輸入萬能の地である。這回財界動搖の影響は市中商社に大破綻を見るが如きこともなく、諸物價に於ては最高時より三割以内の下落に止まり居るも、株式界の影響尤も甚大にて、綿糸布此れに次ぎ、木材も安東縣動搖の爲め取引に一大支障を來し停滯品多く、困難の状況にあれども、朝鮮銀行の貸出聲明は此等財界一部の危機を豫防して遺憾なかりしと。

鮮人の購買力は今尙旺盛であつて、日鮮人間の取引も比較的圓滑に進捗しつゝ、あるが去年三月の騷擾以來鮮人の思想一變し、自己の權利を主張する傾向顯著となつて、取引

の慣習に一大改革を見んとして居るそふである。

殊に近時、株式の取引、鮮人の思惑的投機思想旺盛となり、株式賣買機關の必要に迫られ、朝鮮最初の株式現物取引市場を八月一日より開始すべく、準備中である。

三井物産會社支店に支店長野村嘉一氏を通じて穀物係主任某氏より朝鮮の米、大豆の現況と取引状態を質れ、拙者當業者として得る處多く、時余にして辭去した。

三井物産を出で、西し、德壽宮の前路を右折して大道を北行し、景福宮に入る。宮は總督府博物館の所屬となつて居る。

博物館事務所に刺を通すれば、恰も四時を過ぎて退廳せんとする、館長馬場是一郎氏は元慈慶殿たる應接室に請じ、全鮮の歴史及古美術の話より、鮮人現代の思想問題に及び、談盡きず、氣焰萬丈、博物館長としての閑職よりも、寧ろ政治家として適所ならんと思はれた。聞けば古き法學士であるそふな。

全氏の命にて館員の案内により、特に博物館を開かれて觀覽した、新羅朝以下歴世の佛像、陶磁器、繪畫、古鏡、金屬品、彫刻物等の珍什、古美術品、數萬點を以て滿され

てある。門外漢の拙者も垂涎を禁するを得なかつた。本館を出で、勤政殿の結構を見、舊内閣たりし修政殿内に入り、大阪の久原房之助氏寄贈にかゝる、大谷光瑞氏が、西藏、支那にて多年の日子を費して蒐集したといふ、有名なる發掘物及古書畫等を見て。雜草籬々、瓦は飛散し荒廢に任された殿宇、樓閣を廻つて、後に行けば、慶會樓がある、四十八本の大花崗石柱に支へられ、建築復宏壯である。國王宴遊の處にて、樓下に蓮池がある、恰も蓮花は艶を競ふて當年の雄風を語るが如く、實に宮中の一大異彩である。樓上に登臨して、癡癡して行く王宮の跡を眺めては、そゞろに寂寥の感じにうたる、を覺えた。當景福宮は文祿の役兵火に罹つて焼失せしものを、一代の傑物時の攝政大院君が再建を謀り、所謂民の膏血を絞つて怨府となつた有名な大工事である、明治三年の竣工であるが、かの明治十七年此處にて王妃閔氏の殺害事件あつて以來、宮居を昌德宮に遷し、現在は總督府の所有となつて居る。目下勤政殿の前面廣地に千數百坪を相して、五百萬圓を投じ、總督府の新築中である。今や工事既に半ばにあるが、完成竣工の上は京城の一大偉觀として仰がれるであらふ。

六時三十分宿に歸つて入浴、終日見物の汗を流す。今夜京城を去るにあたり、郡氏を初め總督府の幹旋に努められ、一行視察上特に便宜を計られたるは、縣人諸氏の厚意と共に深く感謝する次第である。

夜十一時縣人數氏に見送られて京城南大門驛發北行車中に投じた。

四、安東縣

(七月七日—七月八日)

平壤に着く頃目覺む、窓外の風物南鮮と異り原野多くして未墾の地は大陸的氣分に漲り、民情も亦自ら異なるを覺える。去り乍ら總体朝鮮人は怠惰である、勿論百年の永き專政政治の惡政下に壓服せられた、傳統的國民性であるから、此を改造するには勿論一朝一夕のことではないが、此は決して彼等箇人の問題に非ずして實に朝鮮其ものゝ重大問題であると同時に我帝國の問題である、一度朝鮮を旅行した者は誰れでも、到る處の路傍や木蔭に晝寢をなし、或は雜談に耽り、一向生活などには頓着せざるが如き餘りに其のみすばらしきに驚かぬ者はなからう。全く彼等の怠惰なる事は豫想外であつて、其

の筋の調査によれば、京城だけでも遊食者四五萬はあるさうだ。而して是等の遊食者は、單に遊食するに止まらず、所謂小人閑居して不善を爲すの喩に洩れず、兎角よからぬことを仕出かすものである。であるから朝鮮の開発はまづ此の怠惰を改むるに非ずんば覺東ないと思ふ、まづ勤儉の美德、勞動の神聖なる事を教へ、そうして精神的物質的の兩方面の向上發展に就て、有ゆる手段を用ゐて誘導、教化する事は、實に統治經營上各方面を通じて上下の留意すべき点ではあるまいか。無論農事の改良、殖産工業の振興等其の施設、普及に希望すべき事柄は際限もないが、要は一七百萬民衆の覺醒にある、即ち怠惰放縱の生活を改めしめるにある。朝鮮を去るに臨んで拙者が僅々數日の滞在に於ける皮想の觀察を述べて識者の留意を求むる所次である。

新義州驛に着すれば最早支那人多く、汽車より柞蠶を搬出するを見る、今柞蠶の出廻期であらふ。有名な鴨綠江の大鐵橋を渡れば、支那である。十一時十分安東驛に着した。支那税關吏の荷物檢閲所に行つて、單簡に手荷物の検査を済まし、支那車夫に引かれて元寶館に投宿した。

電報で依頼して置いた、拙者の取引先日陸公司の金井周次氏來訪せられ、午餐後市中の案内を約して別る。

晝食後金井氏の東道にてまづ領事館に入江領事を訪問。在留安東邦人の現況及當地支那人の對日本人關係等を承り、商業會議所に行き、茶木書記長より時餘に渉つて貿易、金融、取引状態、工業等を聞く。河一筋の此處安東縣では未だ漸く大正六年度の統計より出來て居ない。其理由を質れるを、支那の税關では、統計が杜撰な上、調査後一年以上も過ぎて漸く發表するのだから、纏めるにはどうしても一二年は後れて終ふ、其れで尙且頗る疑はしいと。會議所の大正八年末調査になる重要品の統計を見ると輸出貿易としては木材三千萬圓。柞蠶二千百萬圓。大豆粕千二百四十八萬圓。豆油六百餘萬圓。豆類五百三十二萬圓等であつて、輸入品は綿糸布を最とし金物類、砂糖等で輸入總額金九千八百三十四萬圓であるが、輸出品は前記の重要品を合して一億五千三十萬圓である。此の輸出入額には支那方面の戒克船取引ジャンクも含まれて居るのであると。此を以て觀るも鴨綠江流域には如何に無限の寶庫が藏せられて居るといふことが分るのである。

茶木氏の案内にて全所附屬の安東商品陳列館を觀る。木材の標本。柞蠶糸の加工品等各種各様の陳列にて滿され、支那貨幣の多種多様な陳列を見て、其の説明を聞けども實に複雑にして容易に解することが出來ない。

去つて六道溝なる鴨綠江製材無限制公司に行き社員浦部氏の案内にて、説明を聞きつゝ、三萬餘坪の全工場を觀覽す。其の規模宏大にて作業の秩序一糸亂れず、觀る者をして思はず懨を正さしむ。當公司は日支合辦にて大倉組の經營である、現在使用者七百五十人全部支那苦力にて、五百四十馬力の汽機に使用する燃料は、總て當工場にて出來る、鋸屑及木屑にて、鋸屑二噸又は三噸を以て石炭一噸の火力に對比し得、然も此の木屑類は自給して餘れるものを全部の使用者に燃料として無料供給し、尙且つ一般希望者へ賣捌く金額は一ヶ年八萬圓より十萬圓に上ると。當工場大正八年度の製産額三百萬圓にて滿州方面へ殆んど製品の全部を仕向けて居ることである。

俾を連れて江岸通なる日本人唯一の豆粕工場我取引先金井氏經營の日陸公司に入り、目下財界不況にて作業休止せざるも乞ふて工場を見、説明を求む。一日製造能力豆粕四千

豆油二萬斤である。

金井氏に乞ふて作業中の支那人油坊を見んきて、支那街なる沙河鎮に行つた。街路凸凹甚だしく、然も雑踏して塵埃濛々、不潔の極みである。三四の油坊を歴訪したが、皆事業休止にて見ることを得ず。漸く成順泰油坊に至り作業せる状態を見る。丸裸の支那人が敏捷に立ち働く熟練せる技能に敬服すると同時に大に得る處があつた。當油坊は三十二臺の新式水壓機を使用し一日豆粕二千七八百枚、豆油一萬四千斤を製出する能力があるのである。

木材豆に亞いで重要品の一つとして益々事業の膨脹著しき、柞蠶製系工場は十四五ヶ所ある。是非工場を見たいと希望したが、生憎休業期なので遺憾ながら何處でも見る事が出来なかつた。柞蠶系は將來國際貿易の關係となるべき素質があつて、英米人の此れに着目する者多く、現に外國行として、上海、香港を経由しつゝあるの状態であるから、此点に就ては滿州に絶對利權を持つて居る、日本當業者として大に戒心を要する事を信ずる。夜日陞公司金井氏の招きにより、新市街の○小亭にて夕食の饗應を受けた、席に待り

し藝技連が名物鴨綠江節を唄ふを聞く、彼等も亦水の如く流れ行くのであらふ。十時當市股盛の中心なる市場通の夜色を見つゝ宿に歸つた。晝の疲れが身に迫つて來るのを覺える。

八日朝食後他の一行が鴨綠江鐵橋見物に行つた間に、拙者は取引先日陞公司へ昨日の謝禮旁、大豆類の取引方法及豆粕の製法等を詳かにすべく八時金井君を訪問した。

大豆の賣買には糧市(取引所)。糧棧(糧坊ともいふ仲買人の如きもの)の二機關によつて構成されてゐる、最初支那人賣主は糧棧に賣買を委託す。此の場合必ず見本品を提供するのである。糧棧は其の委託によつて、糧市に行き相手方を求めて、賣買をするのであつて、賣買成立の上は、現物なれば二三日中先物なれば所定の期日に、相方所定の場所——概ね戎克船積であるから、大抵受渡場所は鴨綠江河岸になつて居る——に立會の上、買人側の榭入人夫が榭入をして受渡しを完了するのであつて、代金は現物は勿論、先物取引さいへども必ず約定成立後二三日中には授受を完了するのである。尤も支那人は商業道徳を尊重する事、嚴格であるから、現先取引共受渡しの不履行を生ぜし例

曾て一回もなしとの事である。

大豆類の取引建の標準は次の通りである。

一大豆 百支那石建（日本樹約百八十二石）（支那樹は各地方により大差あり）

大豆の受渡しは總て「バラ」取引にて麻袋等の容器は買主の負擔となつて居る。

一豆粕 一千枚建

検査標準は一枚四十七斤以上と定め、一千枚中の五十枚の平均目方に因る。

一豆油 一萬支那斤建（日本斤約九千百十三斤）

此の取引に要する貨幣は、兩（馬蹄銀）と小洋銀のみに限られて居る。

次に貨幣のことを聞くに、古來支那には統一せる幣制がない。通貨は内外相混じ、本位に金、銀、銅あり又紙幣あり、鑄造貨あり、地金あり、其の準備價格も一樣ならずして、千差萬別紛糾錯雜を極むること殆んど名狀すべからずである。従つて日々貨幣相場に變動があつて、支那各地に於ても各基本を異にして居るから、貨幣相場の標準を定むる爲め日々取引所の如き制度の下に、日に一回乃至二回取引人が集合して貨幣の賣買を

なし銀本位の標準相場を造つて對支那人取引に用ゐて居る。如此時々刻々變動して止まぬのであるから、商人は折角商品で儲けても金銀の開きで損をする、ことが度々ある、此間の呼吸を呑み込んだ者には至極面白いだらふが、取引上常に危險が伴ふこととなる。支那人相手の取引には先づ此關係から研究してかゝらねばならぬ。當地は銀市インスー稱して一日一回早朝に開市し各取引關係商店より場立人を派遣して賣買取引を行ふて居る。そうして金銀及びすべての軟貨も賣買されて居るが、其の基本は兩（馬蹄銀）建となつてゐる。安東縣には目下大豆粕製造工場（油坊）は日本人經營の日陞公司と支那人經營のものがある。而して豆油の出油量は平均一枚五斤と見て大差がない。

今序だから豆粕の製法を記して見やう。

まづ大豆を工場の一部に設けてある貯藏倉庫に入れ、其の一部に取付てある漏斗より温豆機といふ太い鐵筒に入れ幾分の熱度を加へて、エレベーターに因り上部へ上げ、更に下部へ放下するさき、土砂其他の夾雜物を除去し、又エレベーターにて上部に上げ、

鐵樋を通じてローラの如き碎豆機によつて扁平に壓搾したものを、約五十斤半（大豆として二斗三斗三合位）に檢量し、此を一枚の分量として、麻布を廣げたる蒸釜に入れ平かにして其の上を油草と稱する蒸草の如きものにて履ひ（油草は一つは蒸釜の蓋となり一つは搾油機に移す際豆を包むに使用する爲め同時に蒸して柔かにするのである）約二分間内外熱氣によつて蒸し終つたものを、油草に包みて二枚の金輪に入れ、足にて踏み込み完全に油草に包んで、一枚づゝ水壓を利用せる假締機に掛け、更に搾油機に積重ね一定の時間を限つて搾油するのである。搾油し終れば、一枚宛油草より取出し周圍の椽を削り取り、直ちに檢量するのであつて、温きものにて四十八斤を合格の標準として居る。

搾油機には舊式に楔^{ツサビシメ}及ヂヤツキ^{シメ}の二種ありて共に一回五枚づゝ。新式は水壓機にて一回十二枚より十五枚位にて、舊式は一晝夜六七回、新式は九回位搾油し得らるゝのである。油はタンクへ入れ一週間又は十日位を放置し不純物の沈澱するを待つて、石油罐へ移し入れるので。一罐の目方は正味二十八斤二分五厘であるそゝな。

當地の大豆粕仕向先は内地を最とし。油は大連市場へ輸出されて居るが。兩品とも少量ではあるが支那人によつて南支那方面へも仕向られて居る。

序だから大豆の貯藏法に就て簡単に述べよう。

滿州の特産物として無限に各市場へ搬出される大豆は到底、倉庫へ收容するさいふこそは種々の点よりして至難なるは論を俟たない、従つて一部のものは「バラ」のまゝ倉庫に收容されてあるが、概ね屋外へアンペラ巻にて藁屋根を造り「バラ」のまゝ野積をするのである、此を囤積^{トシ}と稱して一圃に五六百石より大なるは千石位收容してある。此の貯藏法は滿州到る處何れの地にても見る處であつて、然も費用を要せざる良法であるは勿論二三年の貯藏にも耐え得るさいふのだから、至極重寶なものである。

汽車の時間にはまだ間があるさいふので、金井君の案内にて、安東の背後滿鐵經營の鎮江山公園に上る。市街は一眸の内に集まり、鴨綠江は長蛇の如く、對岸新義州は指呼の内にあつて、實に形勝の地を占めて居る。

安東縣は最近勃興せし新市街にて、内地人の住するもの一萬餘人、其の新市街は日露

戦當時軍政によつて建設せられ、街衢實に井然として碁局の如く、排水の便、氾濫に備ふる堤防など頗る整頓し、自ら大市街を形成すべき素質なるにも拘らず、現在軍政當時に比し在留邦人の減少を見、市街の如き空地多く、建築物亦軍政時代の狭少なるもの多きは、其の原因する處多々あるべしといへども、又爲政者に一班の責なきを得ない。聞けば朝鮮總督府の如き鴨綠江貿易として舟楫の点に於て天與の地ならざる、新義州の建設に莫大の資金を投じ安東縣に對抗せんとして然も効績の見るべきものなしと、徒らに如此內的競争は勢力の分立となつて、日本として取るべき方針にあらざることを思ふ、須らく大日本として此の日支の關門にして既に準備せられたる、天與の地安東の發展に全力を濺ぎ確固たる商權の樹立を望むものである。殊に當地貿易は日、鮮、滿、鐵道三線運賃の統一と國境隣接の關係上、支那關稅に於て三分の一の減率恩点あるを記せざるべからず。又勤勉にて勞力低廉なる無數の支那人ありて、怠惰なる鮮人に比すべくもないのである。安東縣を去るに臨み、識者の一考を煩はして置く。

午前十一時安東驛發、金井氏の見送りを煩はす。車中暑苦しいこと此の上もない。

意外の景色は自ら朝鮮と變つて居る。民家にも遊んで居るものなどはない、皆働いて居る、沿線見渡すところ、路らしき路はなく、河は流るゝがまゝで橋梁など見たくもない。人馬は皆河中を渡渉して居る。高粱と大豆は青々と發育し、四圍山を以つて裏まれて居るが樹木の見るべきものなく、トンネル多くして晝の旅行には不愉快ではあるが、朝鮮を見た目には意外の風物に變化が多い。

本溪湖の煤鐵公司を左窓に見て、隆盛な事業を祝福しつつ、漸く奉天に近づく頃より車窓の景色が一變して、所謂滿洲の茫々たる原野が展開された、此邊一帶の地日露の役沙河大會戦の古戰場であつて「浩々乎として平沙垠り無く負に人を見ず、河水滄帶し羣山糾紛たり黯として慘悴風悲み日曠き」當年を追憶するの情湧然として胸に迫るを覺えるのである。

原野に赤い夕日の沈む頃、宏大な露天フラット奉天驛に着いた。乗換の一時間を利用して、構内ヤマトホテル食堂に入り夕食を済し、八時十五分、大連行の列車に乗つた。汽車は山一つ見えぬ廣い平野をキラ／＼光る星影を頂いてヒタ走りに走る。南へ。

五、大連

(七月九日—七月一日)

目覺めた頃は、もう遼東半島へ来て居る。普蘭店の鹽田、金州の招魂碑、南山の古戰場等を指呼の内に送迎して、八時大連に着いた。停車場の存外貧弱なのは物足りない。縣人赤塚彌太郎氏友人吉田寅造君、吉岡、奥知、丸山の諸君に出迎へられ、吉田君の準備せられた遼東ホテルに投宿した。

休憩中赤塚氏來訪、吉田君と今日の視察計畫につき打合せて歸られた、十時頃より吉田君の東道にて、支那馬車二輛に分乗してまづ、大連商業會議所に書記長篠崎嘉郎君を訪れ大連の經濟狀態を承る。大連最近の發展は實に想像も及ばぬ程の目覺しさで、滿洲を背負ふて立つて居るかの觀がある、其の貿易額の如きも、南北滿洲の大半を占め大正八年度の如き總額六億七千萬圓に垂んとし、優に朝鮮全道の貿易額を凌ぐの盛況である。篠崎氏の御説の通り大連の盛衰は日本の消長に關する、こと甚大なるが爲め、政府は極力大連の發展に努むるの方針を採りつゝ、ありさといふのも、穴勝過言ではない。同氏の所論

として、全滿洲の勢力分布は、支那側は北滿に、日本は南滿にあるのであるから、日本は大連に、支那はハルビンに發展するのは兩國の爲め理想的であると説いて居る。大に肯察に價する議論として拜聽した。

今大正八年度の大連輸出入及重要品目を記して參考とせしやう。(單位圓)

一、輸入總額 三六六、八五〇、〇〇〇

内重要品價格

綿糸布類 四九、四〇〇、〇〇〇

金物類 三三、五三〇、〇〇〇

鐵道材料 一六、五〇〇、〇〇〇

米 一五、〇〇〇、〇〇〇

砂糖 一〇、四〇〇、〇〇〇

茶 三、六九〇、〇〇〇

一、輸出總額 三〇二、四三〇、〇〇〇

物見業實支滿鮮

内重要品價格

大豆粕	八四、五〇〇、〇〇〇
大豆油	六〇、八〇〇、〇〇〇
大豆	五八、五〇〇、〇〇〇
其他豆類	九、一三〇、〇〇〇
小麥	六、〇〇〇、〇〇〇
柞蠶	四、七四〇、〇〇〇

右か噸數別にすると輸入に於て百四十一萬噸、輸出に於て二百八十一萬六千噸となるのであつて。十年前の明治四十三年度輸入額三千百十六萬圓(三十六萬八千噸)。輸出額三千七百十六萬圓(九十二萬二千噸)に比較する時は噸數に於て三倍三分。金額に於て十倍となり。全く隔世の感がある。

何といふても滿洲は大豆の國。豆粕の工場である。大豆を見ずして滿洲を語るの資格がないといはれて居る位だから此處でも二三の豆粕工場を觀たいと思ひ、吉田君を煩し

大連

て、就中大きな工場である日清豆粕會社、三泰油房、小寺油房、鈴木油房等へ電話で聞き合したが、多くは作業を休んでゐる。幸ひ小寺油房だけは作業して居るといふので觀ることが出來た、社員の小林氏に案内されて、特に一行の爲め休憩して居る丸裸の苦力を働かせて、製造作業の順序を觀る。方法は安東縣で見たのと同じではない、只規模が大きい丈けである。當油房は動力百馬力、三十六臺の新式大型水壓機にて一日の製造全能力四千五百枚に及ぶところである。小林氏の話しによると、此處は流石に豆粕油工業の中心だけに工場數現在五十七箇所(内日本人經營五箇所)ありて一日の製産高十一萬枚を超へ、撒豆粕は鈴木油房の獨占にて一日優に百五十噸を製出し得る。そうして大連に集まる大豆は、一ヶ年百五十萬噸ありて内七割は加工品即ち大豆粕及豆油となるのである。

午餐後二時大連取引所に所長井村大吉氏(縣人)を訪問す、恰も市場は午後の立會時間として立會場大に混雜を極め、喧々囂々取引の眞最中である。井村氏の案内にて取引の實況を見る。取引方法は内地取引所の如く仲買人制度にあらすして、取引人制度なるが故、

取引人の數も非常に多く、一定の時間中、のべつ幕なしに競賣買又は相對賣買行はれ、相場も區々であるが、取引成立の上は買賣者相方にては共有競賣買の方式となる仕組である。而うして取引の履行を担保するには別に設置せる民營の大連取引所信託會社を設けて、取引の履行を増保し、取引に關する清算事務を増當せしめて居るのであつて、取引人は信託會社に對し身元保證金及證據金賣買手数料を納付することになつて居る。

此處は大豆、豆粕、豆油等の重要物産のみの取引であつて銀票の取引は、取引所の附屬として大連取引所錢鈔部にて取引されて居る。取引の履行、擔保清算等の事は前項の如くやはり大連取引所錢鈔信託會社といふのがある。

當取引所は關東都督府の直營にて、重要物産の賣買取引につき民間の必要に迫られて建設したものであつて、現在大連、長春、開原、四平街、鐵嶺、奉天の六ヶ所にある尙大豆等の検査方法は取引所に於て標準を定め、滿鐵經營の混合保管倉庫にて検査をするといふことになつて居る。

井村氏の斡旋にて取引所の鶴沼氏の案内により、**滿鐵埠頭事務所**に行き調査係主任久

保田氏を通じて篠原所員が案内、説明の勞を取られた。大連埠頭は露國が一千萬留の巨資を投じて築造したるものを、我國が關東州を經營するに及び更に三千萬圓を費して修理造築を加へ、滿鐵會社が引繼を受けて以來、諸般の設備整頓せるだけあつて、規模の大なる、東洋稀に見るところである。埠頭は第一、第二、第三、にて三四千噸級の汽船三十四隻を一時に繋留し得らる。構内には倉庫大小六十三棟、しかも、最大のものは一棟五千四百坪五萬噸の荷物即ち大豆粕なれば約百八十萬枚を收容し得られる。倉庫の以外に所謂野積場所として七萬八千坪の土地が用意せられてある。

今こゝで聞き得た、大豆、豆粕の検査方法を述べよう。

輸出賣買せんとするものは、前記倉庫の内混合保管倉庫に搬出して検査を受ける、大豆粕は一千枚中四十枚を五枚宛に別ちて検査し、平均一枚四十六斤以上を以つて合格と定める、若し一、四十枚を検量するも、平均四十六斤に満たざる時は全部一千枚を検量し尙平均目方が標準目方たる四十六斤に満たざる時は不合格として、赤線を記し、倉庫外に放出されるのである。大豆の検査は検査員と保管者組合に於て撰定せる委員と立會

の上、検査し特等には○印、普通には□印、格下には印を附し他は不合格とするのである。容器の麻袋も、新、舊一等（一明き）、舊二等（合格圏内に入るもの）の三等に検査するのである。

前記滿鐵會社經營の混合保管は、検査済の大豆又は豆粕に對して證券の發行を受け得られ、融通、買賣自由にして、荷出しの場合検査の保證ある制度である。

夫れから特別仕立のランチに乗つて港内を一周した。埠頭の左右は水深二十尺乃至三十尺にして、優に一萬噸以上の巨船を横付けにすることが出来る。延長一千二百尺の東防波堤と一萬二千五百尺の西北防波堤とが左右から出て居つて、約一百万坪の海面を抱擁して居る。大正八年中出入汽船五千七百八十八隻、帆船一萬六百四十七隻。總噸數實に八百七十五萬噸であるが、現在の設備にて優に一ヶ年千五百萬噸の船舶を自由に出入せしめ得るのであるから、只唯驚くの外はない。

六時歸宿。伊賀人今中良君及び友人吉岡、奥地兩君の勧めらるゝまゝに馬車に同乗して市外西南二里餘の星ヶ浦遊園地に遊ぶ。滿鐵會社の經營にして西北に丘地を負ひ、樹木

清々しく、南方海に面して一帯の長汀曲浦は海水浴に適し、避暑避寒ともに絶好の保養地なるを思はしめる、歸途は電車によつて宿に歸つた。

十一日。丸山氏（名賀郡出身の青年也）の來訪を受けて同氏の案内により、滿鐵本社に縣人にて地方部庶務課長山西恒郎氏を訪問す、流石は四億圓の大會社だけに仕事は大きい。滿州は何も云つても滿鐵王國の觀がある。其の事業の範圍も鐵道、運送、倉庫、保險、船舶、築港、炭坑、製鐵、電氣、瓦斯、旅館等より都市の經營、土木、教育、衛生殖産工業の研究等に及び、其の經營振りは普通の營利會社のやふにケチ／＼したものではない、宛も軍隊と警察権のない國家である。其の餘裕ある經營振りの御話を聞き。同氏の紹介状を頂戴して、まづ伏見臺の中央試験所に行く。刺を通じて所長代理齊藤氏に面會す、同所は先年より所務を縮少して専ら、試験と研究の二項を掌つて居るが、此所は實に滿州に於ける工業發達の源泉たるは論を俟たない、同氏の案内によつて、分析應用化學、製糸、染色、窯業、釀造、衛生、電氣化學科等の研究實物に付き懇切なる説明を聞き、廣大なる試験、研究の各室を巡覽した。

辭して馬車を市外西北四哩の沙河口に馳せた、日は午下りにて日光の直射愈酷しく、土砂の然も凸凹多き路を車上の人に用捨もなく馬は走り、土煙濛々として呼吸も爲めに塞がれんばかり、一時間近くを揺られ、漸く、沙河口満鐵工場に辿り附いた。工場の應接室に通されて進めらるゝ、流茶に渴を醫す。一行中の生川君は苦痛に堪えず途中から一人歸つたさいふ始末である。

工場長横井氏に面會し工場の概況を聞き、案内されて駈け足的に數十棟の大工場を観る、工場敷地約三十萬坪、使用職工六千人にて獨立の水道を敷設し、發電所を設け、各般新式の設備萬端を具備して居る。現在機關車二十六輛、客車三十六輛、貨車百三十輛を同時に製造修理し且諸機械及諸用品の製作修理をも爲し得る能力を有してゐるさのこゝである。三時半辭して宿に歸る。

一行連日の疲勞極度に達し倦怠の色あり、丸山氏の勞を犒ふて別れ、今夕縣人會の歡迎會に出席する迄の時間を自由行動と決めた。拙者は少憩後吉岡、奥知兩君を訪ひ、三人打連れて支那風呂に行き其の趣味を味ふて疲れを慰めた。七時吉田君に誘はれて縣人

會の歡迎會場たる大和ホテルの屋上庭園ルーフガーデンに上つて夕日に輝く大連の壯觀を一瞬に蒐め、一幅の繪巻物を見るが如く感じた。主客十四名屋上の卓子を圍んで歡談笑語、一見舊知の如く、赤塚氏の歡迎辭に拙者の答辭にて宴を閉じ、微風に面を拂はせつゝ、市街を漫步して九時宿に歸つた。

大連は現在の人口(大正九年五月末調)市内外を通じて十八萬七千人内、内地人五萬八千、前月の統計に比し戸數一千餘の増加なるにも拘らず人口の移住、増殖激甚にて終始市民は住宅難に惱まされ、地價従つて異常の騰貴をなしたるに見るも其の發展の速度尋常一様ならざるを思はしめるのである。

六、旅 順 (七月一日)

今日は旅順の戦蹟見物である、大連驛にて吉田君夫妻及丸山君が一行を案内せらるゝ、か爲め七時五十分發の列車に同乗せられ九時旅順に着いた。吉田君の通知によつて旅順の縣人會員上島徳三郎及山本房太郎兩氏を初め數氏の出迎を受け、馬車に分乘して新舊

市街の境界龍河を西へ渡つて新市街に入る、建物は何れも露人の建設にかゝり宏壯にして主に官廳、學校、官舎などがある。靜かな感じのいゝ街だ。博物館に車を下り、入つて館長代理中川氏の案内にて館内を一巡す。蒐集品豊富にて各方面に渉つて居る。田中善助氏寄贈の文縁役當時藤堂高虎公の戦利品たる朝鮮の甲冑は一段の異彩を放ち、縣人の爲め大に意を強ふするを覺えた、出で、博物館附屬の考古館に入り滿蒙、支那の古代文明を偲ぶ、就中大谷光瑞氏寄贈の支那新疆にて發掘の木乃伊三体は、一點の欠陥なく完全なるものにて特に好奇の眼を欲だてた。

馬車を驅つて西北一里有餘の坂路を登り爾靈山の戦迹を訪ふ。二〇三高地の頂上に上れば流石旅順の死命を制せし樞要の地にて、四望海潤、港内は勿論港外より西は鳩灣、楊樹溝方面より双島灣附近一帶、旅順背面の各砲臺、堡壘は指呼の内にあつて、遠く金州南山より近く乃木軍の本營たりし水師營等脚下に集まり實に絶好の景勝にて要害の地であることは、素人目にも容易に領かれる。

爾靈山紀念碑の下に紀念の撮影をする。寫眞師は三十九年以來當地にありて地理に詳

かなるを聞き、乞ふて現地に臨み戦闘當時の説明を聞く、詳を穿ち細を極めて、思はず血湧き肉躍るを覺える。今尙彈丸の破片散亂して當時の「鐵血覆山山形改」を乃木將軍が賦せられた如く如何に戦闘の慘憺、激烈なりしことが偲ばれる。此彈丸破片を手にし、貴き靈の宿つて居る山上に立つて、今自分が尋ね來つた朝鮮、滿洲各地に於て我帝國の國力發展の迹を顧るべきは、皆これ我忠勇義烈なる勇士の血と肉とを以て贏ち得たるものであることが湧然として胸を突くのである。嗚呼「萬人齊仰爾靈山」。自分は地下に眠れる幾萬の將士に對し衷心感謝の念を禁じ得なかつた。

萬感を胸に藏して下山し、上島氏の私宅にて午餐の饗應を受け、同氏が自ら老鐵山にて發掘せる石斧を頂戴して少憩の間もなく又馬車を驅つて白玉山に登臨した。脚下に舊市街たる商業區が展開されて居る。要塞戦歿者の英靈を慰め、其遺烈を千載に傳へん爲め、丘上に天を摩して矗立せる東郷乃木兩將軍發起の下に建設せられた表忠塔を仰ぎ見て、崇高の念禁じ難く自ら頭への下るを覺えた。同じく山嶺の納骨祠に詣で、中西氏の盡力にて不朽の怨を止めた二萬の英靈を合祠せる内部を拜することを得た。

豫完の時間も餘すところ尠なく、遺憾ながら堡壘の跡を訪ふを得ずして、戦跡紀念陳列館に行く。此建物は元露兵の俱樂部であつたものを、其まゝ使用せるものにて當時の彈痕今尙歴々として存し、當時の戦況を偲ぶに足る彼我の兵器に血痕の焦げついたものや、要塞遺跡の模型等、如何に攻圍戦の凄慘なりしかを無言の内に語つて居る。繪葉書などを購ふて停車場に戻つた。

旅順を去るに臨んで炎天下を終日案内の勞を惜まれざりし、中西淺七君及丸山君其の他縣人諸氏に對し茲に特筆して感謝の誠意を表して置く。

午後四時五十分旅順を後にして六時十五分大連着。縣人を代表して鈴木外之吉氏の見送を受け諸氏の厚遇を深謝して七時大連發北行の車中に入り撫順に向つた、夜色迫つて冷涼の氣身に沁むを覺える。

七、撫順

(七月二日)

午前七時十五分蘇家屯にて撫順行列車に乗換へる。途中深井子驛にて豫て依頼してあ

つた、獨立守備隊の友人上田外一君の出迎を受け、八時五十一分撫順に着いた。上田君の豫め用意せられてあつた、自動車にて滿鐵撫順炭礦所に小日山庶務課長を訪問す。同氏公務多忙の爲め女長大津留聰君代つて面接せられ、炭礦の概略を聞き、乞ふて大山坑内の觀覽を快諾せられ。辭して大山坑事務所に行く、早速上衣を脱ぎて坑内用コート及帽子を借用し、社員井上氏の案内にて各自安全燈を手にして深さ千二百三十四尺の地下に降つた、エレベーターの時間僅かに五十秒。空氣の壓迫に耳は聾せんばかりだ。坑内は通風器によりて涼しく、電燈輝き覆線の軌道は石炭及材料の輸送に馳せ違ひ、坑内事務所の如き廣潤にして地下千有餘尺の底にありとも思えぬ。

奥へくさ進む内坑道愈狭く直立して歩行出來ず、電燈もなくて僅かに薄暗き安全燈によつて、水溜りたる足下を照しつゝ進み、天井にて頭を打つこと數回漸く行き止まりたる處にて、七八人の苦力が安全燈の光りによつて鵜嘴を働かせつゝある、採掘の現状を見る。當炭礦の採炭法は殘柱法に適せざる爲め灑砂充填法を實施してゐる。これは炭を採つた坑道へ砂を填めて行く方法で、殘柱法の如く木柱のいらぬと瓦斯の發生する

禍根を斷ち剩さへ出炭量は殘柱法によるものと比べて約二倍半、乃至三倍の多きこと等の特色がある。此充填法には多量の砂を容易に得る事がまづ第一要件であるが、幸ひ此處は渾河の流れがすぐ側に在るので、費用尠なく無限に採取し得られるのである。約一時間を坑内に費して漸く地上に出で、上田氏の案内にて採炭を機械力にて篩分け直ちに貨車に積込みつゝある實況を見る。

隣接せる炭礦工業課に田中氏の紹介狀を呈して課長岡村金藏氏（伊賀出身）を訪れ、同氏自らの案内にて工場、モンド瓦斯發生爐等を一覽す。同氏の説明によれば當工業課は滿鐵會社が電力、動力及電氣鐵道用電力供給の爲め、發電所の擴張を必要とし英人モンド式瓦斯發生爐を敷設し發電所を起したものであつて、發電動力一萬三千である。然うして撫順炭は窒素の含有量頗る多く、世界中稀に見るの量にして。平均一・五パーセントを下らぬ。そこで副産物として採收装置を備へ、從來廢棄せられたる硬炭ボタと石炭とを混合し、電力によつて之れを氣化し硫酸アンモニアを製造してゐる。目下一日十五噸、大正八年度に於て約五千噸の產出を見たとのことで、此硫安の含有窒素は二十一パーセ

ントである。輸出先は内地工業界を擾亂せんことを避けて重に大連を経て南支及南洋方面へ仕向けてゐる。而して其の發生したる瓦斯は汽罐内に燃燒せしめ發電機に必要な蒸氣を供給し、此の電力によつて電氣鐵道、電氣機關車を動かして撫順驛以東に於ける石炭の運搬と各坑充填用土砂運搬及尙客車をも運轉して各坑區の交通に非常な利便を與へて居る。

岡村氏の懇切なる説明を謝し、自動車を馳せて古城子の露天堀を地上より俯瞰す。其の壯觀には嘆稱せざるを得なかつた。

撫順炭礦の全區域東西四里、南北一里、千八百二十萬坪にて、古城子、千金寨等露天堀の炭層實に四百尺の厚さがあること、現在九坑區の出炭量益能率向上して一日約八千噸より一萬噸にて。大正九年度の採炭豫想高は三百二十萬噸なりと、宜なり使用坑夫三萬四千人である。

如此世界に冠たる炭礦を有する撫順市街は、舊新の兩區に分れ、従業員の舍宅多く、公會堂、俱樂部、學校、醫院、炭礦事務所、警察署等、結構壯麗なる建築櫛比し、大正

九年五月末調による人口四萬二千人、内、内地人一萬三千餘人。藝娼妓の如き日、支、鮮人を通じて約一千人を算するを見るも如何に其の繁盛なるかを視ふに足るのである。上田君の斡旋にて筑紫館の大席間に入り非常に遅れたる午餐を喫す、朝來の大活動に倦怠の色あり、一時間餘休息して午後四時十分上田君に見送られて撫順驛發車奉天に向つた。乗換の蘇家屯驛にてスグ乗換へ得らるべき豫定の列車は、事故の爲め二時間遅延の揭示板を見て、早速今發車せんとする貨車連結の緩急車に乘車せんことを驛員に交渉して、漸く許され、御蔭にて豫定より三十分早く六時四十分奉天に着いた。兼れて往途約束せし構内ヤマトホテルに入る。滿洲の夜は涼しく涼風室内に満ちて晝の暑氣を忘れ早くより柔かきベットに親しむ。

八、奉 天 (七月一三日)

奉天は清の太祖が帝業を肇めし所にして瀋陽又は盛京の別名がある。遼河の支流渾河の河畔に位し南滿本線及安奉、京奉の三鐵道の要衝に當り、四通八達滿蒙貿易の中央市

場として將來あるの地である。市街は城内、滿鐵附屬地、開埠地の三區界に分ち人口通じて約二十五萬、滿洲第一の大都會にして、東三省巡閱使張作霖の本據、政治上の中心地にて、事あるごとに北京政府に對して一敵國の觀をなして居る。市街中滿鐵附屬地は街路廣濶、人道、車馬道に分ち、公園廣場、上下水道等諸般の設備殆んど間然する處なく、煉瓦造の大夏高樓軒を並べ今尙建築中のもの多く、文明的新市街として推稱するに足る。近來内地人の來り住むもの漸く多く本年五月末調査によれば一萬三千を超えて居る。

まづ奉天商業會議所を訪ひ所員古市氏より奉天の將來を聞く。元來生産地にあらざして寧ろ消費地である奉天は、何等特有の物産はない、従つて集散市場といふ事が出來ない、然し滿洲の中心地だけに金融機關の完備と、交通の發達は貨物の中繼取扱地として發展するの素質がある、殊に將來四鄭鐵道其他奉天を中心とする、豫定鐵道完成と共に奉天は滿蒙經濟界の中心市場として囑目するの價値あるを思ふのである。加ふるに滿蒙特産物の第二位にある畜産業の發達に伴ひ、羊毛、皮革業の工業地として尤も地の利

を占めつゝある當地には此種の事業漸く多きを加へ、現に滿蒙毛織株式會社（資本金一千万圓）滿蒙纖維工業株式會社（資本金三百萬圓）滿洲殖産株式會社（資本金三百萬圓）等の見るべき此種會社の設立ある等。門外漢たる拙者も内地斯業者の大に奮起を促して止まないものである。

此外に尤も健實に發展しつゝある南滿洲製糖株式會社（資本金一千万圓）があるが、往訪の時間なく其の盛況を見ざりしは遺憾であつた。

序に奉天驛に於ける輸出入貨物の數量を舉げて奉天貿易の狀況を知るの参考としやう大正八年度に於ける輸入總計三十萬七千八百五十五噸にて綿糸布、小麥、米、麥粉、皮革獸骨等を主とし、輸出總計二十二萬五千二百十噸にて豆粕、粟、麥粉、綿糸布、雜穀種子、大豆、皮革類、米等最たるものである。

奉天總領事館に行く。赤塚總領事上京中にて代理大橋領事官補及中野書記生に面會し滿洲經濟界の窮況等を聞き。突發せし北京政局紛争に對し一行が北京行の安否を質せしに口を極めて其中止を勸告せられた。

奉天宮殿及北陵拜觀の手續書を頂戴して領事館を辭し、午餐後二時より自動車にて城内に入る。市街は想像して居つた程立派ではない。殊に今朝來の降雨さて街路はまるで泥田のやふだ。

三井物産會社出張所に加藤清司君を訪れ、特産物たる大豆類の作況、現在財界動搖に因る當地の不況等を聞き。何處も同じ秋の夕暮の感を深ふして辭し去る。

奉天城内は北京事變の爲め戒嚴令布かれ、軍隊の警戒物々しきを眺めつゝ交渉署に行き許可書を得て宮殿に入った。周圍には高き城壁を環らし、草茫々たれ共、流石清の大祖高皇帝及び太宗文皇帝の宮居せし所さて建築の結構、雅麗を極めて居る。三層の鳳凰樓に上つて奉天城内外の展望を恣にし、番人の「日本金進上」の無心に金を與へて忽々此處を出で、城外西北三哩の北陵に赴く。北陵は昭陵と稱して、漠々たる滿洲の荒野中稀に見る翠綠滴るが如き鬱蒼たる森林中に在つて、清朝の太宗文皇帝の寢陵である。規模極めて宏壯にして屋瓦は黄金色を帯び頗る壯麗に見ゆる。寢宮は土饅頭形にして崇高の念自ら湧くを覺える。陵碑には漢、滿、蒙の三國語を刻んであるのを見て、當時清朝

の隆盛と権力が想像せられる。又此處にても番人に「金進上」を浴せられ與ふれば幾回も強請して止まず、苦々しき沙汰である。

歸路大平原に牧羊を放てる様などを見て、大陸的氣分の漲るを覺え夕方ホテルに歸る夕食後明日北京行のこゝ一行の問題となり、奉天驛長秋山氏に會ふて旅行の安危を質したるに京漢、津浦線は不通にて滿鐵も連絡取扱中止となり居り、京奉線の如きも既に當地張作霖は昨日來、吉林、黒龍江督軍を奉天に招致し最高軍事會議開催中にて、一部出兵を見たるの状況なれば決して平安なる旅行にあらず。一旦宿に歸り議決せざる折柄三井の加藤君來訪せられ。状況を聞くに既に天津、北京間は危殆に瀕し或は不通となり居るの虞れあり、殊に當地張督軍の兵は本日一箇師團出兵せしにより、寧ろ途中の危険を恐るゝさて同意せず。こゝに一行の議は中止と決し豫定を變更して、明日は滿洲大豆の中心集散地たる開原を視察し、又大連に引返して海路上海に向ふこととなつた。加藤君と携へて夜の市街を散歩した。

奉天領事館にて聞き得たる最近の當地に於ける製茶の需給状態を記して當業者の資料

こしやう。

一、奉天に於ける綠茶の需要状況

奉天に於ける綠茶の需要は在留邦人の人口増加に伴ひ年々増加の傾向にあつて、昨年以來頗る賣行活況を呈し來りたるも由來日本茶は、邦人以外の需要微々たるものにて、常に邦人と來往交際せる支那人間に中等品以下の煎茶類が僅に購買せらるゝに過ぎずして、將來と雖も支那人向としての販路擴張の見込はない。邦人間に於ても賣行の旺なるは煎茶にして、番茶之れに次ぎ玉露製は最下位にある。

一、茶の産出地

當地に輸入せらるゝ煎茶、番茶類は概ね静岡産であつて。宇治産は玉露及僅少の煎茶に過ぎないのである。

一、輸入年額及關稅運賃

内地産地と直接取引を爲すもの、大連其他の卸商より取引を爲すものとの二種

ある。大正八年度の輸入額は

玉露製 金七千圓

煎茶、番茶 金二萬五千圓

茶類の運賃及通關税を計上する時は、概ね原價の一割乃至一割四五分を要するものである。

一、支那茶の状況

支那茶は、一般邦人の嗜好に適せざるが如しと雖も、價格低廉なると城の内外支那街に在住する邦人は周圍の情況より容易に支那茶を購入し得らるゝ便宜あるが爲め、支那茶を用ふるもの漸く多きを見るに至つたのである。

支那茶は主として南支地方に産するが故毎年六、七月頃營口を経て多數輸入せられ、大正八年度の如き奉天驛調査によれば、輸入四百九十五噸、輸出三百九十二噸といふ盛況を現して居る。

九、開原

(七月一四日—七月一五日)

午前を視察日記や、荷物の整理に費して、十二時三十分奉天發、三時間程にして三時三十分開原に着く、新らしく開拓された市街で、遼河水運の衰退と、大連の發達に伴ふ輸送上の便利と、大豆の大々的産地海龍方面に至る要衝に當つて居る等の地の利を占め從來此地方一帯の中心市場たりし鐵嶺の勢力を壓倒して、一躍滿洲大豆の取引中心地となつたのである。在留邦人逐次増加して目下二千に満たすといへども、當地より海龍城に至る開龍鐵道完成の曉は更に一層の繁盛を招來するであらふ。市街には支那商人大部分を占め、數千坪の敷地を擁し一見城郭のやうな素張らしい糧棧が軒を列れて、大豆出盛期の盛觀を思はしめる。

旅館開原ホテルに入り少憩の後、拙者單獨にて三井物産會社出張所に舍弟の友人後藤秀一君を訪れ、主任岡本氏に紹介され、大豆類の状態を質れた。

大正八年度に於ける特産品の當地出廻高は實に四十一萬一千四百噸であつて、昨年一月の如き停車場のみにて三千三百車(約十萬噸)の滞貨を見たるが如き状態にて、取引旺盛なる時は開原市中大豆の山を築くが如き状況を呈するのである

大豆粕油房も現在十六箇所(内日本人經營一箇所秀生油房といふ)ありて、概して新式水壓機により合計一日の全生産高二萬枚に達し、益製油業の増加擴張の傾向にある。從來當地産大豆粕は大連市場に於て、欠斤により所謂奥地物と稱して不評なりしが、銳意改善に努めたる結果混合保管に於ても検査標準を一枚四十六斤五分と定め、優良品として市場に好評なりとのことである。

後藤君の案内により市中糧棧(大豆商)の囤積状況を見るに、方法に於ては安東縣に於て見たるものより更に變りはない、只現今不況時代なるが故商人活氣なく、徒らに囤積を抱擁せるは氣の毒に堪えぬ、宜なり囤積として停滯せる大豆は今や三千五六百車(一車は三十噸五分)に上つて居るさいふのである。然し支那人は對人信用確實強固にして今回の如き動搖時代に際會するも未だ曾て、總ての取引に於て不履行者を生ぜず、三井物産の如き全部支那人を限り取引をなし内地人との取引を希望せざるに見ても明かである。後藤君に送られて宿へ歸つた。

十五日朝來既に温度九十度を示し、加ふるに少々勝を害して聊か困憊の氣味がある。

元氣を鼓して三井出張所を訪ひ岡本君の案内にて開原取引所に行き所長吉田程治氏に面會、諸種の事項を聴取し、同氏の説明を聞きつゝ、立會中の現場を見る。取引所の組織取引の状態は大連取引所と變りがない。只取引の建値に於て幾分の相違があるのみである。即ち開原樹一斗(和三十一斤)を單位とし、取引貨幣は洋銀建ヤンチエンとなつて居るのである。而うして取引の敏活を期する爲め七十有餘の取引人へ各直接電話を架設してある設備は到底内地の何れの地にも見るこゝの出來ない制度である。取引高は現先物を通じて最近一ヶ年五萬五六千車に上つて居ることである。

後藤君の案内にて市街を見物し、停車場に出で、混合保管倉庫を見た、説明によると現在三棟二千七百八十坪收容能力大豆五百五十車である。此外に前年滞貨の實例に徴し滿鐵會社にては野積場所を擴張して約五千車の收容地域が準備されてある。

到る處にて特産物として大豆の豊富なる數字に驚かされたが、何處で聞いても滿洲全体の總收穫高を詳かにする事が出來ない、滿洲の如き土地に於て、數字上の事を知らんとするのは無理な注文であるが、各地にて聞き得たものを綜合すると、一ヶ年約二千萬

石位の見當である。開原地方にては一天地(日本の六反位)にて六石(一石は日本一石四斗位)位の收穫はあるが、年々開墾の増加、耕作の改良等によつて産額の増加あることは疑ふの餘地がない。大豆に次いで高粱の産額もなかく莫大なものである。何れにしても滿洲の生命は農産物の消長如何にあるのだ。

開原發午後一時後藤君に見送られて奉天に向ふ。車中支那將卒の多數奉天に下車するのを見た、無論武裝嚴しく堂々たるものだ、奉天にて乗換時間を利用し、一浴して暑かりし一日の汗を流す。奉天發午後八時十五分の夜行にて又南へ向つた。豪雨沛然として來り、冷涼の氣頓に加はり蘇生の思ひをした。

一〇、上海まで

(七月一六日—七月一八日)

夜來の雨止みそうにもない、風さへ加つて物凄、新聞を見ると、朝鮮龍山は、漢江の氾濫にて浸水家屋數千、鐵道貨物の流失等にて損害が夥しいと報ぜられて居る。久しく旱魃の爲め今年の作柄を悲觀されて居つた朝鮮滿洲の農作物も蘇つたこと、思はれる

滿洲にしても朝鮮にしても喜雨であらねばならぬ。

十六日朝八時大連着、遼東ホテルの厄介となつた。終日の雨に外出も出来ない。殊に雨の少ない當地方では一般下流社會にては雨天を安息日と定め、雨具の用意を缺き、殷賑なる大連市街も殊の外寂しい。拙者も前日來の腹工合がどうも思はしくない、何となく物憂い、一行も皆倦怠の色がある、動議一決して今日一日を休養することとした。

滿洲へ足を踏み入れてより驅けすり歩くこと十日、極めて皮相の觀に過ぎないが、多少の得るところはないでもない。

一口に滿洲を赭土の茫漠たる大原野の如く想像せる未見の人多からんも、決して滿洲の平野は草茫茫たるものではない。現今にては鐵道沿線の如き耕かされざる土地なく、大豆と高粱は青々として見渡す限り繁茂し畦畔には楊柳翠を競ふて居る。然うして耕作法の如きも朝鮮に比して遙かに進歩して居るのを見るのである。

殊に事業界に至つては、朝鮮の如く素人が僅少の資本を以て金儲けが出来るといふ譯にはいかぬ、少なくとも滿洲に於て事業を經營しやふと志すものは餘程の覺悟を以つて

十分な調査研究と相當の資本を必要とする。是なくして漫然と飛出すのは、實に無謀であつて、恰も舵なくして船を大洋に乗り入るゝと同様、危険此上もない。殊に南滿の地は既に秩序が整つて居る。だから一攫千金を夢みるが如き投機的人物よりは、相當の學問と人格とを有する着實にして志操堅固、永住の計を樹つる事業家を要求して居るのである。

滿洲の地を去るに際し、特に邦家の爲め此種事業家の來つて此の廣濶なる天地に活躍せられん事を切望する。

十七日まだ雨は晴れぬ、上海行の櫛丸は正午出帆するから、荷物を整えて十一時乗船した、折柄在連中の友人吉岡君が見送つて下さつた。船は三千四百噸の滿鐵定期航路である。上海航路だけに歐米人の乗客が多い、船内の設備は綺麗に行き届いて居るが、天候險惡の爲め動搖激しく、陰晴な十八日も不快に暮れた。

一一、上海（其一）（七月一九日）

十九日未明に甲板へ飛び出す、船員に聞けばもう船は楊子江へ入つて居るそうだが、右を向いても左を向いても更に陸らしいものはない、兼ねく聞いて居たが到底川らしい想像もつかぬ、併し昨日迄紺碧であつた蒼波は變じて黄濁色の波となり靜かにうねつて居る。

船は漸く進みて右舷に朝暾を拜し、祖國を遙かに思ふて心身頓に爽快を覺える。朝食後服を改めて甲板に出づれば、もう吳淞が指呼の内にある。此れから船は長江の支流黃浦江の流域を溯る。上海へはもう程近い、青々とした兩岸には建物などが鮮やかに見られる。陸上にある清快丸や、仁丹の廣告が一種の懐しさを以つて迎えて居るやふに思はれる。

九時半頃船は滿鐵碼頭に着いた。碼頭より見た上海は西洋の街である、支那さういふ感じは更に起らぬ。旅宿を豐陽館と定めて出迎えに來て居るボーイに荷物を托し上陸した税關吏は英國人で型の如く手荷物の中にある。混雜した檢閲も濟まして馬車に揺られつゝ市街を見る、船から見た通り到底日本のどの町でも見るここの出來ぬほごに歐米化

して居る。十時半頃豊陽館に入つて和洋折衷といふよりも洋室に敷かれたといふ方が適當な疊の上に落ち付いて、和服の女中が酌んで出す茶を呑んだ時に漸く支那であることが思はれる程、其れだけ上海は歐米化して居るのである。

早速三井へ電話を掛けて、金津氏(弟の友人)に來着を報じた。一浴晝食後、來訪せられた庄司君(縣人三井物産在勤)と金津君の案内にて市内見物をする。自動車は最も殷賑を極むる上海バンド、南京路等を疾驅して佛蘭西公園を徜徉し、三井物産舎宅の樓上にて湯を醫し郊外に自動車を馳せ沿道の風物を賞しつつ。東亞同文書院に入る。折柄夏期休暇にて教室等閉鎖しあり、刺を通ずれば幸ひ書院の教授なる縣人松永千秋君ありて迎えられ、教室等を一巡して、概況を詳かにするを得た。

應接間の壁間には大正二年七月支那第二次革命の際、砲火に災せられて烏有に歸した書院當時の慘況を畫ける油繪の扁額が架つて居る。現在の校舎は大正六年三月新築竣工したもので、敷地面積一萬千七百坪諸建物七十九棟建坪三千〇十坪にして實に輸奩の美を極めて居る。現在職員三十六名、收容生徒三百五十名(三學年卒業)千二百餘名の卒業

生を出し皆直接若くは間接に對支事業の目的に向つて活動しつつあるそうだ。

松永君に謝して立出で。歸途英人經營のジュエスフィールド公園に入る。規模宏大、樹木の配置變化に富めるを賞し。車上市街を見物しつつ、説明を聞き宿に歸る。

上海街路は、全市街到る處木道が然らずんばアスファルトにて完全なること東洋第一と稱するも過言でない。市街租界は英佛人の管理だけありて清潔なるは勿論、雑踏錯綜せる交通を印度、安南、支那の三國人巡查によつて整理され、交通による總ての支障を未然に豫防して居る有様は、實に秩序の整然たるものである。

夜は又兩君の案内にて三井より廻されたる自動車に乗り、市街の北端にある日本人が大部分の出資をなして經營したる新公園に行き、涼しき園内を徘徊して月を賞し。出で、市街の夜景を見。天蟾舞台といふ支那劇場に入り開演中を一瞥し。上海の東端ポイントといふ江邊の納涼場にて涼味を掬し宿に歸つた。

二二、蘇州より南京

(七月二〇日——七月二一日)

今日は蘇州から南京の見物に出掛ける。前夜約束して置いた通譯俞耀生君と共に滬寧鐵路（上海から南京へ通ずる鐵路）の上海北站へ行く。庄司君に見送られて、七時五十分發車した。列車は支那國有鐵路中の代表的鐵道だけあつて、設備の諸點行届きて乗心地よく、屢々ボーイが熱い茶と、熱い蒸したオルを持つて来て呉れる。窓外は滿洲と異なり豐饒な水田の中を運河が、縦横に通じて居て、青い稻穂の上には舟の帆が隠見する。九時四十分蘇州火車站に着いた。驛に警備して居る兵士と警官が来て一行の名刺を乞ふて、通譯に來往を質れて居る、何の爲だか判らないが警戒の物々しいのに驚いた。驢馬に賃して一行五名、ぐらつく腰を氣にして手綱を繰る、驢の頸には無數の鈴が鳴つて喧ましい。極端に狭い水の都の街路や、田の畔、くづれた廢墟を通り、橋を超へて姑蘇春秋二千五百年の文明を語る、虎丘禪寺に詣でる。荒蕪せる高塔や、千人岩等を見て、府城の俯瞰を恣にし、寺守が勤める苦者を喫つて涼を入れ下山す。暫時にて留園に到り、入場料十仙を徴せられて園内に入る、閑雅幽邃にして支那造園の粹を鍾めし故盛宣懷が私庭たりしものであつて園内遊人の懋ふに委してある。

又も驢上に揺られ、炎天下を走り漸く有名な姑蘇城外寒山寺に着いた。もう十二時は過ぎて然も馬上極度の運動に空腹と、疲勞は身に迫る。寺は荒廢し、明朝の書家文徵明の筆蹟を刻める、唐張繼の楓橋夜泊詩の古碑は、破碎して文体殆んど讀むよしもない。之れに代へる近代の書家愈越の碑などを見つ、境内を一巡し、石摺を買ふた。寺守の僧近舟歡び迎えて洗面と熱き茶を勧め、余等の扇子に詩句を揮毫し愛嬌大に努めて居る。一時間餘をこゝに遊んで二時停車場に戻つた。構内の食堂にて變挺古な洋食に胃の腑を満し、二時五十五分の南京行火車に乗る。窓外の景色は内地と異らない、只山なき家屋の構造が珍らしい。南京に入る頃纒かに樹木なき丘崗の起伏せるを見る外、概れ一望千里の耕野連亘して其の間大小の運河、湖沼を點綴し、舟楫よく通じ土地また肥沃なるを思はしめる。滿洲の馬、南支の船、余等の旅もまた南船北馬かま笑ひ興するうちに日は暮れて七時五十分南京車站へ着いた。驛は下關シヤアカンにあつて南京の通商埠頭である、楊子江を挾んで、天津に通ずる津浦鐵路の終點浦口と相對し、城内の閑寂に比して商業は盛んである。馬車に分乘して城内に入

る。長髮賊の亂及革命亂の修羅場を演ぜし痕歴々として、凄慘の氣を帯べる稻光の城壁を照すを見つゝ、約一里半の路を馳せて九時過ぐる頃、唯一の日本旅館寶來館に着いた。二十一日朝から南京を見物する。此邊一帶昨年排日騒動の餘勢今尙消散せず、往々邦人に危害を加へる無賴漢がある。今日一行の見物に付いても豫め支那警察へ旅宿から通知して置いたものだから、特に各署にては巡警の配備を増加して、一層警戒を嚴にし萬一に備へて居るさいふことだ。心なしか市中を歩いて見ても薄氣味が悪い。

まづ自動車にて明の故宮に行く、宮殿、城門悉く太平賊及革命軍の兵火に罹つて灰燼に歸し、屋宇のない巨大な樓門や、驚く程大きな大理石の礎石が風雨に曝されて居る。此の跡に建てられた古物陳列場に入つて、僅かに保存されてある明代の遺物を見た。

朝陽門を城外へ出て畑道を明の孝陵に行く、陵道は今畑と變じ技工雅趣に富める石人石馬は對立して當年の盛時を無言のうちに語つて居る。明の太祖を祀れる陵墓は周圍に磚壁を繞らして規模宏大なれども、野花咲き雜草離々として徒らに崩壞するに任されてある。

市内狹隘雜踏の中を驅け抜けて秦淮河の畫舫を見る。狭い溝水に泛べる有名な數十の畫舫は風流人士の置酒燕遊を待ち一の美觀を呈して居る。河畔にある孔子以下の聖賢を祀つた夫子廟に賽して、壯麗なる建築美を飽かず眺めた。

附近には茶店、料理店等櫛比し、城内唯一の歡樂境さて實に織るが如き殷賑を極めて居る。新貴芳閣さいふ茶店の樓上に入つて支那茶を啜りながら、市街を俯瞰すれば恰も南京人情、風俗の縮圖を見るの思ひがする。

次は南京に於て建築の雄大と輪奐の美を盡せりさいふ朝天宮を一瞥し。轉じて六朝の佳人莫愁が居住したさいふ、莫愁湖に行く。周圍二哩の池塘にて、湖中蓮花娟を競ひ、岸柳汀蘆と相映じて南京第一の勝境である。湖畔の樓閣は遊人の憩ふに任してある。歸路清涼禪寺に詣で、一さまづ宿に歸つた。

午餐後、また自動車に乗つて日本領事館の前を過ぎ古鷄鳴寺に登つた、こゝは六朝累代居城の遺址にて、殿堂に安置せる多種多様の佛像は金色燦々として香煙たなびき、殿堂の最奥に樓閣ありて眺望絶佳、遠く孝陵より南京城の大半は一瞬のうちに收め得られる

此處には遊客登臨の席を設けて、寺僧苦者を勧めて款待大に努めて居る。

山上の前面稍高き處に對立して北極閣がある。元の至正元年觀衆台としての創建であるといふが、時間の都合にて見物を止め、自動車を南京車站に急がせた。

要するに南京は六朝の舊都であつて、廢殘の都さもないへる。江蘇省の首府。開港地となつてはゐるが商工業としては見るべきものがないけれども天津より上海に通ずる鐵路の連絡驛として通過貿易は相當の多額に上つて居るといふことだ。然し南支教育の淵源地だけあつて米國人の經營する金陵大學や、支那人の南京大學などもあり。北京にもオサク、劣らぬといふ話である。此處には在留外人六百人内外にて内、邦人は百六七十人位居る。

二時三十分南京發の快車といふ急行列車に乗つて午後九時上海に戻つた。

一三、抗 州

(七月二日)

二十二日、今日は杭州西湖の見物、然も日返りといふのだから随分急がしいことだ

昨日の通譯俞君と同行して上海を七時三十五分に發車する。沿道は所謂浙江の大沃野にして渺茫際崖なき水田豐饒の間、到る處水利、自在に通じ、棉花、大豆青々として、就中桑の大樹連亘繁茂し、流石蠶繭の業旺なるの土地として、村落、都邑の人家、來往者の風俗等自ら豐裕の色あるを思はしめるのである。車中に晝食を了へて一時杭州車站に着く。市街を通り抜けて約一里を距る、西湖に行く。湖畔を廻つて景勝の地を占むる新々ホテルに入り、ホテルの遊覽船に乗つて西湖の舟遊をする。四面連轡を繞らして宛然畫圖の内にあるが如く、到底鈍筆のよく盡くべき業ではない、支那人此の明媚なるを謳歌して「上有天堂、下有蘇杭」と。或は支那の「瑞西」と稱して讚嘆し、墨客亦十景を賦し或は三十六名蹟を擧げ、或は七十二勝を數ふる、其の一地々々の勝景悉く一幅の南畫に向ふと異ならぬ。湖心亭の南、湖中更に池水を湛ふる三潭印月に上つて、島中を巡るに、蓮池の上石橋左曲右折して、風致の幽邃典雅なる低徊去るに忍びない。

また舟中の人となつて湖面を一周し、殘雪の景を以つて名ある斷橋に舟を捨て、上陸した。

時間には少々の間があるのさ、生糸、茶の産地といふので、拙者單獨にて領事館を訪れた。領事館は西湖を俯瞰する景勝の位置を占めて居る。代理領事の清野氏が「此處は仙人生活だよ」と冒頭して杭州の概況を話される。

日本租界は城外四哩の地にあつて在留日本人は僅かに三十四五名、輸入賣薬を業とする二軒の藥房を除いては概ね蠶繭機業の附屬品販賣業に従事して居る。貿易の如き總て上海の勢力範圍に屬するが故に、明確な統計的數字を調査することが困難である。曾て領事館に於て調査に着手したが其の不可能なることを知つて中止したといふのである。此の地も排日熱の餘勢衰えず、今尙市中商舖にて日本貨を見れば、無賴の學生が此れを掠奪して燒棄するといふ事が往々ある。

此れは長江一帯、此の邊を通じて汽車の沿道及市街等にも見る事であるが、廣告を利用して「提倡國貨、挽回利權」「愛國同胞、請用國貨」「泣告同胞、抵制日貨」等の文字を無數に見受けるのである、又上海の城内にて目撃した商舖の招牌に「東西洋雜貨」とある東の字を墨黒々さ抹消してあるなど、殊に南京の如き支那客棧(旅宿)にては絶対に日本人の

宿泊を拒絶して居るさい排日的現況から見て、實に日支親善と兩國の外交及經濟上の將來に對して、寔に痛嘆に堪えぬのである、此の問題に就ては日本朝野の有識者によつて十分論議、研究せられつゝあることゝて、余輩こゝに贅せずといへども、一度支那内地に旅して此の事實を見、更に一段の深き印象を受くると同時に、此の問題の解決につき爲政者は勿論、朝野を擧つて慎重研究せられんことを希望して止まぬのである。

領事館を辭して、車站に出で六時十五分の列車に乗る。列車中のボーイ日本語を解し愉快限りなく、時の移るも知らず十一時上海に着いた。

一四、上海 (其二) (七月二三日)

二十三日朝九時單身三井物産會社支店に行き庄司君を介して、穀肥係増田新造君に面會し、肥料に關し詳細なる説明を聞いた。

大豆粕。昨年は漢口豆粕及上海積豆粕を稱して約三十萬枚、日本に向け輸出を見ただけれども、元來長江筋一帯は需要地であつて、年々多額の數量を大連より輸入しつゝあ

るので、全く昨年の如きは變則なる状態にて其理由は價格異常の昂騰により、他品を代用せし結果によるのである。従つて大豆粕としては當地を供給地とするところは出来ぬのである。

綿實粉末。綿實の原料は主として通州、大倉、浦東方面より輸入せらるゝのであつて上海は其の製造場の位置にある。工場としては立德、大有、大德、恒裕、同昌、上海製油等主なるものにて。此外通州に廣生、寧波に同利源といふのがある。當地工場一ヶ年の生産高百四十萬担(担は約百斤位)あつて、殆んど全部日本へ輸出されて居る。

菜種油粕。上海に製造工場なく、全部地方に於いて製造せられること、南支地方に於ける主要な肥料であるから其の需要も多額には上つて居るが、正確な生産高を知る事が出来ぬ。殊に利に敏感き支那人のことであるから、相場關係に因つて上海への出廻には大増減がある。昨八年度の上海港輸出高は六十萬担である。
落花生粉末。上海には現今三井系の工場にて製造するのみであつて、昨八年度の製造

高は十五萬担。内十萬担は日本へ他は臺灣の砂糖用肥料として輸出せられてゐる臺灣に於ては有効成分の豊富にして價格低廉なる關係上、大豆粕代用として逐年輸出増加の傾向にあること。近く上海製油會社にても此種の製造に着手するといふから、開始の上は優に三十萬担以上の輸出を見ることが出来るのである。原料は主として山東、河南方面であつて支那内地にも多數の工場はあるが、此も菜種同様、相場關係によつて出廻に増減がある。殊に支那内地の製品には石砂が混つてゐるので日本向きはならぬ。昨年は上海港を經由して十二萬担の出廻りを見たが、全部南支那方面へ砂糖用肥料として輸出されてゐる、

増田氏に謝して此處を出で、庄司君の案内にて途中、上海取引所の立會を觀、日本人俱樂部にある、日本商業會議所に書記長安原美佐雄君を訪問した。同氏は多年上海にありて經濟上の著述多く、頭腦明晰談論風發の概がある。上海は全支那貿易の約四割を占め昨八年度の如き詳細なる貿易價格は未だ不明なるも出入船舶の數量より見て、實に輸出入總額十億圓の巨額に垂んとして居ることは明かである。殊に當地は列國の經濟的競

争角逐場裡である。一昨大正七年の如き歐洲戦亂の餘映は日本の大發展を促進し、上海貿易に於ける第一位を勝ち得たるも、昨年の日貨排斥事件以來當地は外人勢力の淵藪地なるだけ其の影響の範圍最も廣く、損害の程度更に激甚にて日本船舶は固より恰も日本商品と名の付くものは悉く打撃を蒙らざるはなく、歐洲開戦以來日支貿易の衝に當る者の苦心を以て開拓したる市場は少からず撃退せられて、大正八年は遂に第二位に下るの止むなきに到つた。今大正八年度に於ける上海出入船舶表を見るに、其の總數一萬七千八百三十六隻、千八百五十六萬九千九百四十七噸の内英國は四千五百七十一隻、七百二十萬二千二百二十六噸にして第一位を占め、日本は三千七百九十三隻、五百四十二萬二千二百四噸となつて居るのであつて、英國の一躍して戦前に復歸せる勢力は牢として抜くべからざるを知るのである。

長江貿易の如きも大正七年度第一位にありし日本船は排日以來積載荷主の排斥を受け現今第三位に減少した事實を見るのであつて、現今上海の對日輸出入關係は日本よりの輸入減少し、輸出増加となつて居る。

茲に日本産業上の爲め注意を要する問題は、南支の特産品として將來の發展恐るべきものある、繭糸、製茶の如き英米人は大に此れに着目し、種々の調査研究を怠らず、可及的彼等が本國に於ける需要につき、日本品を排斥して支那品を代用せんとする傾向顯著なるは看過すべからざる事實である。

次に當地輸出入の主なるものは。輸出に於て生糸、柞蠶、茶、棉花、金礦物、豆類、獸毛皮、生卵、麥粉等にて。輸入に於ては綿糸布類を第一とし石油、紙巻煙草、木材、金屬類、石炭、砂糖、燐寸、海産物、諸雜貨等である。

當地の在留日本人二萬三千餘、在留諸外人の全數に比敵せると雖も、其の實勢力に至つては英、佛、米人と比肩するを得ざるの状況にあつて、實に慨嘆に堪えざる次第である。午後庄司君が特別の斡旋にて、三井物産在勤、王氏（上海人）の案内にて城内を見物する。城内は今尙排日の餘勢にて、日本人の入るを危険なりといはれて居る。こゝは外國租界の歐風なるに反し、まるで別世界の觀がある。純然たる支那式にて街路の狹隘な割合には綺麗な街だ、特に綢緞、骨董、象牙細工、玉器等を陳列した商舖が目立つ。城

内中尤も繁華にて雑踏肩摩の湖心亭を見。土産物など購ふて夕刻宿に歸つた。

晚餐後、愈大陸を離れる準備をする。九時庄司、金津の兩君に送られて、明朝四時出帆の郵船筑後丸に乗る。船は荷役に忙しく、多数の苦力は喧しく騒いで居る。

一五、歸 着

(七月二十四日—七月二十八日)

五時目を覺せばもう船は黄浦江を下航して居る。楊子江から流れ込む黄ろい濁つた波の色が漸次、紺青の色に變つてゆく頃から船は漸く揺れ出した。二千三百噸の小さな船だから随分動揺するだらふと内心不安を感じて居たが、それ程の事もなく、船には餘り強くない拙者も、一回として食事を廢するさといふこともなく半ば寢臺に、半ばは甲板に讀書して一日は暮れた。

翌二十五日も只波と雲を見るのみで、至極單調な航海が續く。陸地戀しさの餘りか誰れいふさなく、門司上陸に一決し事務長に頼んで、汽船の切符を汽車の切符に換へて貰ふ。甲板へ出るさ心なしか、雲の模様や、波の色までが日本の氣分に變つて居る。今

夜十時頃には九州の一角が見へるそうだが、闇夜のこゝろて見えないさいふことだ。

二十六日早朝、船は六連島に假泊した。檢疫を待つ爲だ。久しく茫漠たる大陸の景色に馴れた目には關門の景色が又なく美しく此の風景を見た外來人は「世界の公園」と讚嘆するのにも不思議がないと思ふた。

檢疫も簡単に済んで七時半門司港に着く、ランチに乗つて下關鐵道棧橋に上陸し、税關の檢閲も難なく終つて九時三十分下關發の急行列車に乗り、涼しき車窓に隱見する瀬戸内の風光を賞しつゝ、夜の十一時大阪に着いた。

二十七日は大阪に暮れて、二十八日の午前十時五十四分恙なく伊賀上野驛に着、多数の先輩友人諸氏の温かい出迎へを受け、海陸四千四百哩の旅を終つて無事歸宅した。

總ての旅には實業視察たるを、遊覽たるを、趣味たるを問はず必ず有形無形の利益がある、自分は終始「旅行は實社會の學校なり」と信じて居る。然も今回の如き旅行は二十五日間の内に海陸四千四百五十哩、北に南に大陸を駈け廻つて訪問に、見物に、御

馳走に、通信に、實に寧日なしといふ忙しき、殊に僅少の日子では到底皮想の觀察すら覺束ない、併し「百聞は一見に如かず」とやら、大陸に接し、異なつた人情風俗を見、在留邦人の活動を目撃するなど、非常に愉快であつたと同時に、啓蒙するところも亦甚だ多い、然も我在外縣人諸氏が健實なる發展振りを見聞するに及んで、予輩後進者の受けた刺戟は實に尠少ではない。是れ全く到る處在留縣人諸氏の厚意と、斡旋の勞を執つて下さつた、先輩友人諸君の賜に外ならないのである。

茲に其等厚遇を蒙りし各位の芳名を録し謹んで感謝の意を表すると共に、一層邦家の爲め各位の發展と多幸を祈つて欄筆する。

○釜山

- | | | |
|--------|-------|--------|
| 伊藤庄之助君 | 高木隣道君 | 吉川忠太郎君 |
| 中橋兼治郎君 | 成田直郎君 | 井上保太郎君 |
| 伊藤榮藏君 | 伊藤巖君 | 寺尾爲藏君 |

岩中牛六君

中野健次郎君

○京城

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 郡茂徳君 | 菊山嘉男君 | 篠原英太郎君 |
| 小林源六君 | 新貝録太君 | 森本達也君 |
| 小松雄治君 | 山内篤君 | 中條橋吉君 |
| 佐野彦藏君 | 藤木常次郎君 | 今村伊三郎君 |
| 田中林助君 | 鈴木文治郎君 | 川口天民君 |
| 近藤脩君 | 三井榮長君 | 税田谷五郎君 |
| 山田眞一君 | 奥田熊治郎君 | 三山喜三郎君 |
| 橋本鱒市君 | 大村友之丞君 | 野村嘉一君 |
| 馬場是一郎君 | | |

○東安縣

入江正太郎君
浦部廣三郎君

金井周次君
成順泰油坊君

茶木清太郎君

○大連

江原忠君
赤塚彌太郎君
鈴木新五郎君
上野治三郎君
今中夏君
鶴沼憲三君
齋藤試驗所長

井村大吉君
吉田寅造君
鈴木外之吉君
薦井新助君
篠崎嘉郎君
久保田賢一君
橫井實郎君

山西恒郎君
丸山君
太田伊之助君
高尾音次郎君
小林周三君
篠原豐三郎君
奧知憲君

○旅順

上島德三郎君
丸山米吉君
土屋仁太郎君

山本房太郎君
山下外之助君
中川濟君

中西嘉七君
山下助三郎君

○撫順

小日山直登君
大津留聰君

岡村金藏君
井上君

上田外一君

○奉天

大橋領事官補君
加藤清司君

中野書記生君
秋山卯八君

古市寅太郎君
宮崎惣一君

○開原

岡本喜代松君

後藤秀一君

吉田程治君

○上海

庄司雅一君

金津富雄君

增田新造君

松永千秋君

安原美佐雄君

○杭州

清野長太郎君

山上秀直君

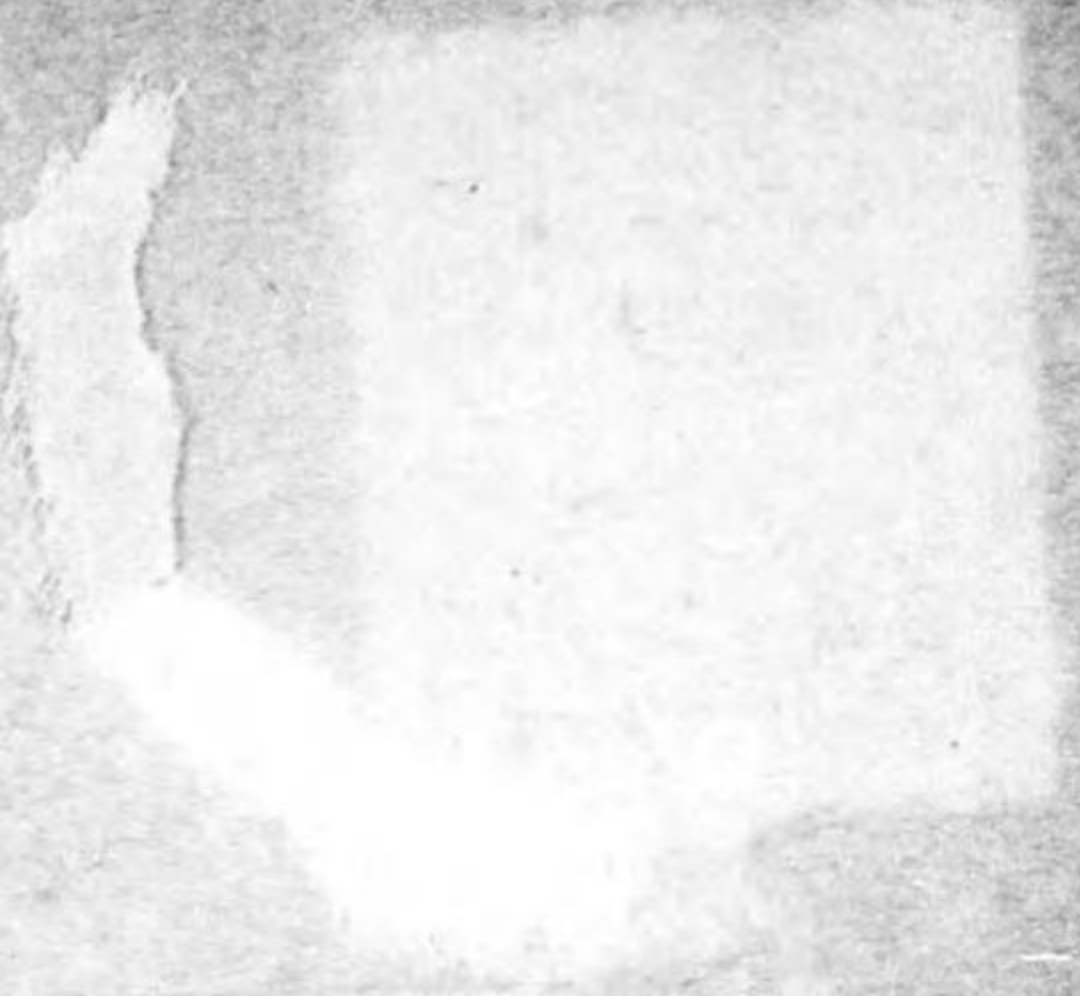
大正九年九月二十日印刷
大正九年九月二十五日發行

(非賣品)

著者 三重縣阿山郡上野町大字惠美須町九十一番屋敷
木津金平

印刷所 三重縣阿山郡上野町大字九之西四十一番地
菊山印刷所

181
543



終

